

湖岸堤天神川水門工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井湾遺跡

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

湖岸堤天神川水門工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井湾遺跡

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序 文

赤野井湾は天然の良港として古くから栄え、近年まで葦のあい間から、浜大津に向かう蒸気船の白煙を見ることができました。

琵琶湖の周辺の自然環境は日々刻々と移り変わっています。湖岸の葦原は管理用道路や水門に変わり、近代的な漁港が誕生しています。

琵琶湖総合開発は湖底に眠る多くの埋蔵文化財に光を与えてくれました。本書はその成果の一部を収めたものです。埋蔵文化財に関する理解と文化財愛護普及の一助になれば幸いです。

最後に、調査関係者の御尽力に対し、厚く感謝致します。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教 育 長

南 光 雄

例 言

1. 本書は湖岸堤天神川水門工事に伴う赤野井湾遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和60年度に発掘調査を実施し、同年度に一部を整理したものである。
2. 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり実施した。
3. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長市原浩、課長補佐中正輝彦、埋蔵文化財係長林博通、
管理係主事山本徳樹。

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長南光雄、事務局長江波弥太郎、埋蔵文化財課長近藤滋、調査一
係主任兼康保明、嘱託調査員濱修、総務課長山下弘、主事松本暢弘、立
入裕子。

4. 現地調査は(財)滋賀県文化財保護協会主任兼康保明、同嘱託濱修を担当として実施し、本書の執筆・編集は濱を中心として行った。
5. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
6. 調査、整理にあたっては、以下の諸氏の協力を得た。
西沢照平、田中幸子、藤本隆之、内田一成、今村浩之、野毛康広、見沢淳一、平岡涉、前川浩昭、木村善弘、上岡明史、寿福滋(写真撮影)。
7. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序 文	
例 言	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の内容	2
第3章 遺 構	3
1. SD-2	3
2. 足跡群	3
3. SD-3	5
4. 瓦 群	5
5. 旧航路	6
第4章 出土遺物	6
1. 土 器	6
2. 金属器	8
3. 瓦	8
4. 木製品	13
第5章 結 び	16

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 (上) 調査地全景 (南西から)
(下) SD-2、SD-3 (南西から)
- 図版 2 遺跡 (上) 足跡 (北東から)
(下) SD-1、瓦出土状況 (北東から)
- 図版 3 遺物出土状況
(上) 瓦出土状況 (北から)
(下) 木器出土状況 (北西から)
- 図版 4 遺物
- 図版 5 遺物
- 図版 6 遺物
- 図版 7 遺物 (上) SD-2 出土
(下) SD-3 出土
- 図版 8 遺物 (上) SD-3 出土
(下) SD-3 出土
- 図版 9 遺物 (上) SD-3 出土
(下) SD-3 出土
- 図版 10 遺物 (上) 瓦群・足跡遺構
(下) SD-3 出土、包含層出土
- 図版 11 遺物 (上) 凹面
(下) 凸面
- 図版 12 遺物 (上) 凹面
(下) 凸面
- 図版 13 遺物 (上) 凹面
(下) 凸面
- 図版 14 遺物 (上) 凹面
(下) 凸面

- 図版15 遺物(上) 凸面
 (下) 凹面
- 図版16 遺物(上) SD-2出土
 (下) SD-2出土
- 図版17 遺物 SD-2出土
- 図版18 遺物(上) SD-2出土
 (下) 足跡遺構出土
- 図版19 遺物 SD-2、包含層出土
- 図版20 遺物(上) 足跡遺構出土
 (下) 包含層出土
- 図版21 遺物 SD-3、足跡遺構、包含層出土
- 図版22 遺物 SD-2、SD-3、足跡遺構、包含層出土
- 図版23 遺物 足跡遺構、包含層出土
- 図版24 調査位置図
- 図版25 調査位置図
- 図版26 遺構平面図
- 図版27 遺物実測図
- 図版28 遺物実測図
- 図版29 遺物実測図
- 図版30 遺物実測図
- 図版31 遺物実測図
- 図版32 遺物実測図
- 図版33 遺物拓本・実測図
- 図版34 遺物拓本・実測図
- 図版35 遺物拓本・実測図
- 図版36 遺物拓本・実測図
- 図版37 遺物拓本・実測図
- 図版38 遺物実測図
- 図版39 遺物実測図
- 図版40 遺物実測図
- 図版41 遺物実測図

挿 図 目 次

- 挿図 1 SD-2、SD-3 断面図
- 挿図 2 足跡一部実測図
- 挿図 3 鬘斗瓦拓本、実測図
- 挿図 4 足跡出土状況

表 目 次

- 表 1 瓦観察表
- 表 2 瓦別平均値表

第1章 遺跡の位置と環境

赤野井湾遺跡は守山市赤野井地先にあり、草津市烏丸崎半島と、旧野洲川の一支流である法竜川とに囲まれた広大な湾内の湖底遺跡である。調査地は守山市街地の湧水を集め、湖に注ぐ天神川の河口から50m沖合に位置する。

今回の調査は琵琶湖総合開発の湖岸堤天神川水門工事に伴う発掘調査で、1984年度の試掘調査をもとに、1985年5月から11月にかけて発掘調査を行い、1986年3月までその一部を整理した。

赤野井湾遺跡は総面積約8万㎡に及び、縄文時代早期から、平安時代にかけての遺跡が発見されている。84年度の試掘調査では湾沖で縄文時代早期から後期の遺物が発見されている。また湖岸の法竜川河口地区では、海拔81.5m付近で、縄文時代後期の良好な一括遺物が検出されている。今年度は試掘調査を含め、赤野井湾遺跡では6ヶ所が調査され、縄文時代早期の押型文土器や縄文時代後期の良好な遺物が湖岸から湾沖にかけて出土している^{註1)}。また、本調査では湖岸地帯から弥生時代から古墳時代の遺構も検出している。

周辺の遺跡では赤野井湾の南に、湖につき出た烏丸崎半島があり、半島の先端から弥生時代前期末の玉造工房が2棟発見されたほか、弥生時代中期の方形周溝墓群が20基以上発見されている^{註2)}。また、赤野井湾に注ぐ守山川や山賀川の河口から内陸地域は山賀遺跡と称され、弥生時代前期から後期にかけての遺物が出土している^{註3)}。また、赤野井湾遺跡の後背地は赤野井浜遺跡^{註4)}で、弥生時代前期の遺跡である。また、湖岸から東へ約2kmには弥生時代から平安時代の赤野井遺跡^{註5)}があり、6世紀後半の建物群は安閑紀2年の「置近江国葦浦屯倉」ではないかと考えている。またこの建物群は条里と異なる南北地割であり、現在でも赤野井や矢島の集落には統一条里以前の南北地割が見られる。

また守山市内の湧水を集めて流れ出る境川は微高地に金ヶ森、三宅、欲賀、森川原横江などの集落を形成している。この微高地には古墳時代前期居住地^{註6)}が出現し、横江遺跡、杉江遺跡、山賀遺跡など中世集落遺跡も発掘されている。

山賀遺跡は山賀町から湖岸までの広い地域で弥生時代から中世までの遺構が存在することが予想され、湖岸に近接するにしたがって時代が古くなっている。

赤野井湾遺跡との関連を考える上で重要な要素をもっている。

- 註1) 大沼芳幸「赤野井湾遺跡」滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、1985
- 註2) 丸山竜平、岡本隆子「烏丸崎遺跡」『滋賀文化財だより』滋賀県文化財保護協会、1985
- 註3) 山崎秀二「野洲川左岸沖積地における集落の展開」『近江地方史研究』第19号、1984
- 註4) 山崎秀二「遺跡分布調査報告書」守山市教育委員会、1977
- 註5) 山崎秀二他「守山市赤野井遺跡」『滋賀県文化財調査年報』（昭和51年度）滋賀県教育委員会、1978
- 註6) 谷口徹他「金ヶ森西遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、1980

第2章 調査の内容

湖岸堤天神川水門工区は84年度試掘調査では、古墳時代の良好な土器や木器が出土し、また、溝状の遺構が検出された。そのため85年度に発掘調査と一部整理調査を行った。調査区は80×90mの鋼矢板で締切った範囲の外周5mをパイロット道路とし、試掘調査のトレンチを利用し、排水溝を掘削し、4インチポンプ2台で常時排水を行った。更にヘドロの堆積で重機の搬入が不可能なため3本のパイロット道路を設定、排土搬出路を確保した。しかし、湧水とヘドロの流出で排水路が埋没したり、6月の長梅雨のため調査区全域が水没するなどの困難を伴った。

調査は試掘調査で確認された古墳時代の包含層まで重機で掘り下げ、人力によって遺構の検出を行った。その結果、表土下から瓦群が出土し、その下層から古墳時代後期の溝や木器群が出土した。また、その溝に切られて、足跡群が検出された。更に下層に弥生時代の溝が検出された。

基本土層は調査区が広範囲なため、地域によって複雑な様相を呈している。湖底面は83.50～83.20mで上層から、Ⅰ層－ヘドロ層、Ⅱ層－黒褐色粘質土層、Ⅲ層－黒褐色シルト層、Ⅳ層－黒褐色腐植土層、Ⅴ層－暗黒褐色粘質土層、Ⅵ層－暗青灰色粘土層である。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は遺物を包含する層で、Ⅱ・Ⅲ層の間には所々で赤褐色粗砂層が堆積し、多数の遺物が含まれている。Ⅵ層は湖岸寄りではそのまま下層に続き、旧航路跡の立割部分では80.40mで厚さ5cmの火山灰層が見られた。沖側ではⅥ層が暗青灰色粗砂層となり、81.50mで直径70cm、長さ3.7mの巨木が出土し、縄文式土器片が出土した。

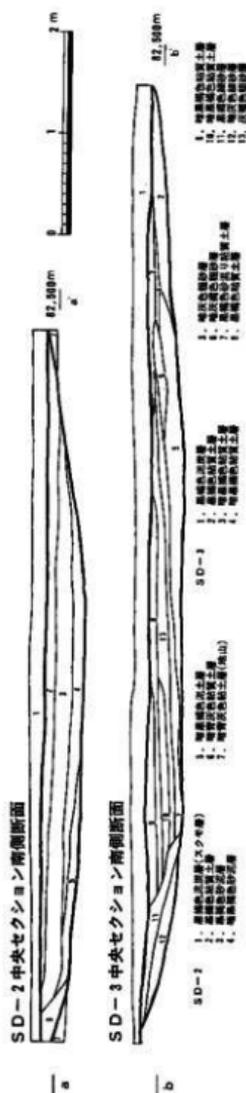
第3章 遺 構

1. SD-2

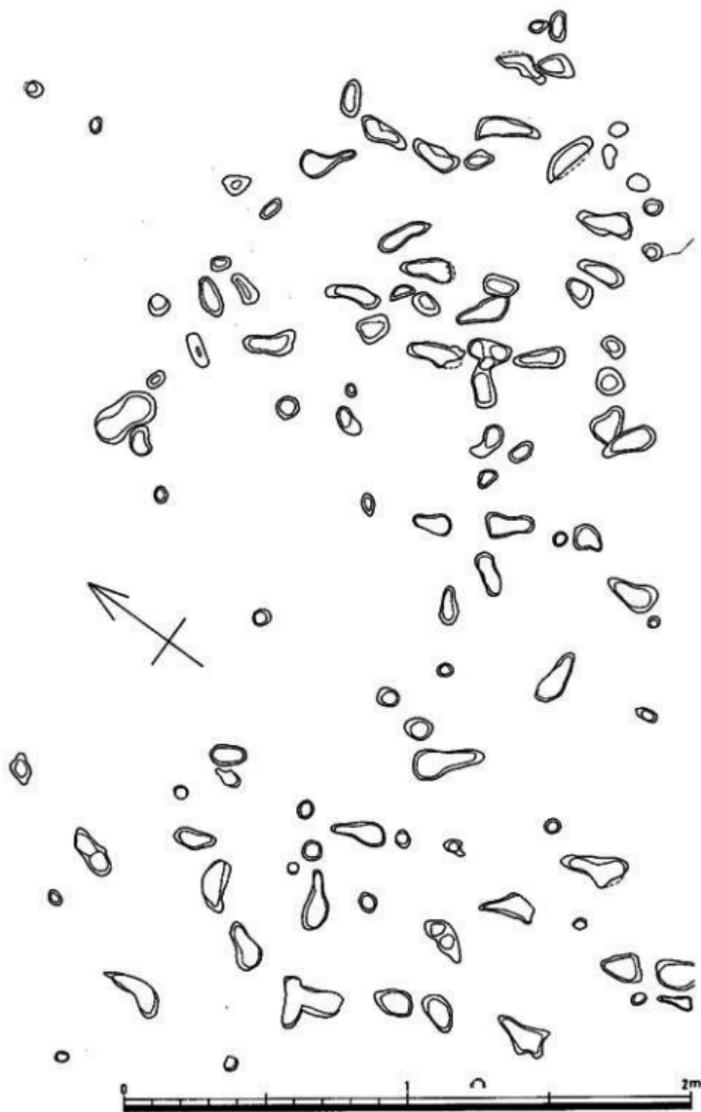
SD-2は調査区の西に位置し、ほぼ南北の大溝である。遺構レベルは82.60mで、BSL-1.77mにあり幅約7m、深さ約40cmだが、南端では約80cmと深くなっており、最下層は地山である暗青灰色粘土層を切り込んでいる。土器の出土量は比較的少ないが、木器は丹塗板、剣形、石彫丁形木製品などが見られる。掘削の時期は明確ではないが、弥生時代後期には埋没したと見られ、自然流路的性格が強いが、現在の湖岸線に平行するように流下する点が特徴的である。

2. 足跡群

調査区東隅で検出された足跡群は、黒褐色の粘質土を踏み込んで、その上面を赤褐色の砂層が瞬時に被ったため、良好に保存されている。足跡の方向性は多様だが、全体に東西方向への移動が見られた。また、調査時点での足跡群の大きさは、大別すると22cmと19cmとなり性別の差と思われる。さらに、この足跡群の南端には畦畔状の高まりと、この畦畔状遺構に平行して流下する2条の溝SD-1が検出されている。SD-1には良好な遺物は含まれていないが、足跡群を被う砂層には古墳前期までの土器が含まれ、また良質の木製品も出土している。足跡層には古墳時代初頭の礎が出土している。遺構の性格は今後分析を進めるが、水田跡と思われる。



挿図1 SD-1、SD-2
断面図



挿図2 足跡一部実測図

3. SD-3

足跡群の被土を切ってW-18°-Nでほぼ北流する溝である。BSL-1.7 mにあり幅約10m、深さ40cmである。溝の側面に平行して、所々に長さ2 mほどの丸木が横たわり、中央部には流路に直交する杭列が認められるなど人工的要素の強い溝である。遺物の出土は2層からなり、下層の暗灰色粗砂層からは古墳時代前期までの遺物を多く含むが、6世紀後半の須恵器が出土する。上層の黒褐色粘質土層からは7世紀初頭の土師器が出土する。遺構の埋没は6世紀後半から7世紀初頭にかけての時期である。この溝もSD-2と同様、現在の湖岸線にほぼ平行して、北方向に流れるものと思われる。

4. 瓦 群

瓦群は調査区のほぼ中央部分南寄りで一括して出土し、少片が北方に帯状に点在した。出土量は総数80点で平瓦が64点、丸瓦が15点、熨斗瓦1点であるが、軒瓦は1点も出土していない。出土状況は積荷が横崩れした様相を呈し、そのほとんどが完型品に近い。また、一括出土地点から帯状に数点が点在し、調査区北端の試掘用排水路からも出土して、ほぼ直線に伸びている。一括出土レベルは82.80m前後でやや堅い黒褐色粘質土上にあり、赤褐色の粗砂層が被っている。瓦の取上げた後に瓦葺き建物の痕跡は見られず、小ピットが点在した。瓦を現地で利用したとは考えにくいことから、湖東地域のある瓦窯から、湖西または京都、奈良方面へ運搬するため集積されたものであろうか。他方、赤野井周辺の旧栗太郡の草津から旧野洲郡にかけて古代寺院が集中していることから、これらの寺院への供給が考えられる。周辺の古代寺院や遺跡の出土瓦のすべてを検討していないが、赤野井湾遺跡出土瓦と同一の瓦の出土があればその供給先は明確になる。いずれにしても、赤野井湾に集積した瓦は琵琶湖の水上交通を利用して運搬するか運搬されてきたものである。

赤野井湾周辺の赤野井、杉江など旧小津村、旧玉津村は式内社小津神社を記す。この杉江、玉津、小津などいずれも港を連想させる地名であり、また、南へ約2 kmには津田江や下物の地名も残る。赤野井湾周辺は古代から湖上交通の要衝といえる。

5. 旧 航 路

調査区を東西方向に走る旧航路帯を検出した。ヘドロの堆積がひどく、範囲の確認のみを行い、一部立割調査を行い、パイロット道路として利用した。幅約7m、深さ80cmであり、埋土には多量の石炭ガラが堆積していた。昭和38年まで湖南汽船会社が天神川河口の野洲浦港を利用して、この航路を通り浜大津に野菜等を運搬していた。航路出口には、地元住民が第一白帆とよぶ柱も残されていた。陸上交通の発達に伴い消滅したこの遺構は、古代からの湖上交通が消滅した点でも象徴的遺構である。

第4章 出土遺物

出土遺物は土器、木器を中心にコンテナケースに約25箱出土した。今回はそのなかで遺構に伴う遺物を中心にまとめ、包含層の土器は割愛し、木器も特徴的なものを図化した。正報告の時点で再度整理する予定である。

1. 土 器

(1) SD-2

J1は口縁部や下下一条の突帯を張り付け、D字の刻目をもち、口縁端部はやや面をなす。滋賀里Ⅳ式の深鉢である。J2は口縁部が折り返して肥厚し面を持ち、外面は荒い条痕で調整され、内面には粘土紐の継目痕が見られる。東海系の無頸壺である。H1からH16は弥生式土器である。H1は頸部に3条以上のヘラ描沈線を持つ壺。甕H2は全体に磨滅して調整は不明である。共に前期のもの。H9とH14は中期の受口状口縁をなす甕。蓋H7は笠型を呈し、中央に截頭円錐形のつまみを有し、口縁部は凹線状をなす。つまみ外面は平滑に仕上げ、体部外面には刺突文、斜行文、波状文で飾り付け、内面にも波状文が見られる。壺H8は口縁部に凹線文が見られる。共に中期のもの。壺H11は胴部が張り、楕円形となる。体部には櫛描の直線文、刺突文、波状文を施す。H15は外面下段3分の2を斜と横のタタキを施し、その上から所々ハケ目調整する。色調は黄褐色をなす。長頸壺H12は口縁部を指おさえて調整し、外面にはハケ目を施すが、全体に粗雑である。甕H16はくの字に屈曲し、口縁部には刻目を持つ、頸部に櫛描の直線文と刺突列点文を施す、色調は赤褐色で焼成は非常に良好で

ある。H10は受口状口縁を持つ甕で口縁部はやや外に開くが、刺突文を施す。後期の土器群と考える。

(2) 足跡遺構

H17、H18が足跡を構成する黒褐色粘質土層から出土した。いずれも受口状口縁部をもつ甕であり、H17は口縁部が斜め上方に伸び、外面に刺突文をもつ、頸部から体部にかけて不統一な直線文と刺突列点文を施す。胴部に波状文と下に帯状の隆帯を一条施す。内面は指押えと、爪圧痕が見られる。H18は口縁部が水平方向に伸び、頸部には直線文が見られる。H17は弥生時代後期、H18は古墳時代初頭と思われる。

(3) SD-3

甕H19はくの字に外反する、口縁部につまみ出しがある。H20は口縁部がやや上方に伸びる受口状口縁の甕、H21～H23は口縁部に沈線をもつ甕と壺である。弥生時代中期のもの。H24～H28はくの字状に屈曲する口縁部をもつ甕である。H24は外面に短いハケ目が連なる。H25、H26、H28は口縁端部を上方につまみ上げている。H29～H36は受口状口縁を持つ甕類である。弥生時代後期から古墳時代初頭の土器である。H37～H39は布留式土器の特色をもつ壺である。坏H45～H47はいずれも赤褐色で、口縁部が外反する。H48～H51は小型丸底壺で、H50は頸部に直径5mmの焼成後の穿孔があり、内面はヘラ状工具で削られている。いずれも布留式に併行する時期である。甕H52は口縁部の一部をつまみ出している。H60はやや小型の甕である。H61は長甕で口縁部をつまみ上げて、くの字に外反している。体部外面の削りは、薄い器壁を上から保填し再度削り取ったものである。6世紀中ごろのもの。H62は口縁部を強くつまみ上げ横ナデをし、やや受口状となる甕である。

坏H63はSD-3上層の黒褐色粘質土層から出土した。口縁部は内側に面をなしやや外反する。外面の底部から3分の2はヘラケズリと上段はヘラミガキが施される。内面には2段の暗文が密に施される。径高指数は4.8と高い。飛鳥小墾田宮推定地の溝S D50(註1)に併行する時期と思われる。

S1～S22はSD-3F層出土の須恵器である。S2～S9は天井部と口縁部をわけける稜が見られるが、S7は凹線化し、S2はわずかに鋭さを残している。S10～S

15は天井部を口縁部を区画する凹線は見られず、全体に丸身を帯び、口縁部は丸くおさめる。坏身はS16～S22である。S16～S20は立ちあがりが比較的長く、口縁部に段を有するものもある。S21、S22は立ちあがりは内傾し、短くなる。TK23からT^{註2)}K43にかけての5世紀末から6世紀後半の時期であろう。

(4) 瓦 群

瓦群は黒褐色粘質土上にあり、赤褐色粗砂が被土となっていた。土器は少量で完型品は出土してなく、砂層から出土した土器が多いため、土器から瓦の年代を決めるのは少々困難である。S23、S24は砂層より出土した須恵器で時期差がある。土師器の坏H64は外面上半にヘラミガキを施し、下半をヘラケズリし、内面には2段の暗文がある。H65は外面のヘラミガキが認められないが、底部内面にはわずかにラセン文^{註3)}が認められる。径高指数は25前後で、飛鳥V期に比定できよう。

2. 金 属 器

T1～T3はSD-3の下層より出土し、T4は古墳時代の包含層から出土した。いずれも鉄器である。T2の刀子は鹿角柄で、鹿角柄と閃の間に薄い木片が左右から楔状に挿入されている目釘がある。T3、T4はいずれも古墳時代の鉄鎌である。T3は側面に使用痕と見られる擦痕があり、T4は基部から3～3.5cmに斜方向の着柄した木質痕が認められる。いずれも身の基端は折り曲げられて柄との固定を図っているが、背を下に、刃を上^{註3)}に基部を右におくと、基端の折りまげはT3が手前に、T4は逆方向に曲げられている。

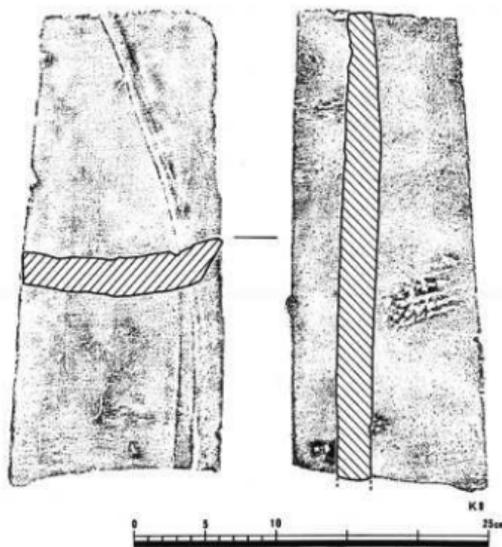
3. 瓦

瓦の出土総数は80点で平瓦64点、丸瓦15点、鬘斗瓦1点である。平瓦には特殊な切溝をもった道具瓦も含めてある。

K1は凹面の梓板痕が明瞭に残るが、高い部分はナデ消してある。左側縁がわに布合せ痕状の凹線が見られる。凸面は格子叩きのあとナデ消しを施す。叩きは広端面では平行に狭端面では左下りの斜方向である。側面には凹面の面取りの他に2回の調整痕が見られ、石の動きも同側面で広端面方向と狭端面方向の2方向に動いている。分

割角度はほぼ90°を示しているが、削痕が2回見られる点から分割断面とは見られない。K2はやや大型であり、重量も大きい。凹面には広端面を上にして右下方に走る糸切り痕が明瞭である。広端縁には凹線状の圧痕が見られる。広端面は数回の削痕が見られ、狭端面にはわずかに布目圧痕が見られる。凸面の叩きは革かヘラによる荒い横ナデで消されている。側面の石の動きは狭端面から広端面である。K3は焼成十分でクラックが入っている。凹面は杵板痕が明瞭で幅3.5cmの杵板が狭端面で7枚見られる。凸面の叩きはほとんどナデ消され、更に手掌痕が多く見られる。左側面は少なくとも4回の削り調整痕が見られる。K4の凹面には粘土板継ぎ目痕が見られる。凸面のナデ消しは広端面では不十分であるが、狭端面は荒い横ナデが見られる。分割角度は約80°と鋭角をなす。K5～K8は特殊な溝切瓦である。成形技法、調整手法ともに他の平瓦と変らない。K5は面取りがなく、凹面の広端縁に断面三角の突起した凸線が見られる。切溝は幅2cm、長さ5.6～6cmである。K6の切溝はK5とは中央線から見て対になる。幅は2～2.3cm、長さ4.3cmである。凹面右上に特有の圧痕が見られ、

切溝の周囲はクラックを押えて補強している。K7は焼成は堅緻である。切溝は幅2cm、長さ1cmと短く、広端面の左端寄りである。しかし、両側面から2.5cmと4cmの所に幅2.4cmの切溝工程途中と思われる痕跡があり、凸面に貫通している。狭端面右下は長軸に対し約60°で隅切されているが、狭端面には焼成途中で付着した粘土が見られる。K8は広端面中央から左へ長さ3.5cmで直角に切



挿図3 製斗瓦拓本・実測図

表1 瓦 観 葉 表

No	種類	厚さ (mm)		重量 (g)		法		色 調	胎 體	土	焼 成	格子目 (3cm)	布 目 (1cm)	特 徴
		広	平	重	容	広端面	全長							
1	平	2.1	1.8	4.3	27.6	25.9	39.6	灰色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) 多量に含む		硬	4×4	6×5	(1) 枠板底をナデ消し、左右面取り。 (2) 格子目印きあとナデ消し、広端面にヘラ状ナデ有り。
2	平	3.0	2.4	5.6	27.2	26.0	39.8	灰白色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) 多量に含む		硬	4×4	6×6	(1) 狭端面に布目風有り、枠板底有り、左右面取り、一部指ナデ、指押底有、広端面より下1cmに0.6cmの凹溝有り。 (2) 格子目印きあとナデ消し、指押底有り、広端面に布目風有。
3	平	2.0	2.4	5.2	27.5	26.6	38.5	青灰色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) 多量に含む		堅軟		6×6	(1) 枠板底7枚巾3.5cm、糸切り裏り葉、右側より左側下に斜め、ナデ調整、左面取り。 (2) 格子目印きあとナデ、布目風一筋有り。
4	平	2.2	1.9	4.1	27.8	25.7	38.8	灰白色	粗砂を 微量に含む		硬	4×5	6×6	(1) 枠板底を指ナデ、左右面取り。 (2) 格子目印きあとナデ消し、指押底有り、右側面にわずかに布目風。
5	(平)	2.3	2.0	5.1	27.8	24.4	38.5	青灰色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) 多量に含む		堅軟		6×5	(1) 広端面中央より約0.5×0.5cmの凹溝有り。 広端面右側に10.0.5cmの凸溝あり、広端面左側より左下に糸切り底10cm有り、枠板底6おすかに施す。狭端面に布目風3ヶ所 広端面右に布目風2ヶ所、面取りナシ。 (2) 格子目印きあとナデ消し。
6	(平)	2.3	1.7	4.4	28.8	26.0	39.4	青灰色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) を少量に含む		堅軟	4×4	6×7	(1) 広端面中央より2×4.3cmの凹溝有り、 広端面右側5cm下に巾0.4cmの凹溝あり、 部分的にヘラ状ナデ、左側面に布目風有。 (2) 格子目印きあとナデ、指押底有り。
7	(平)	2.1	1.7	4.1	26.4	(23.4)	37.6	青灰色	粗 漚 (2.0mm~1.5cm) を少量に含む		堅軟		6×7	(1) 広端面下左右に巾0.3cm長さ2.6cmの切溝有り、 溝工底面中の凹溝有り、指ナデ、左右面取り。 (2) 格子目印きあとナデ、狭端面延長2.5cm、 60°の切取り。
8	(平)	2.3	1.8	4.1	(27.2)	26.0	39.0	青灰色	粗 漚 (0.2mm~1.5cm) を少量に含む		堅軟		6×6	(1) 広端面中央より左に13.5×3.5cmの切溝有り、 枠板底、糸切底、指押底有り、一部ナデ、左右面取り。

9	坂斗	2.5	1.7	1.9	(15.0)	12.5	(33.0)	灰白色	細 礫 (0.2mm~1.5cm) 多量に含む	硬	4 × 5	6 × 7	(2) 格子目印きあと全体ナゲ消し、布目縦数 々所有り、指押紙、ヘラ状ナゲ有り。 (1) 正格子目印きあとナゲ、表裏面に布目縦 有り。 (2) 粘土粘着日鮮明、右側面取、平直を分辯 半織したものとかわれる。 (3) 広端部は欠損している。
10	平	1.8	1.8	2.2	19.4	11.3	36.8	青灰色	細 礫 (0.2mm~1.5cm) 少量に含む	堅緻	6 × 6	6 × 6	(1) 印きあと薄らず、わずかに布目、ヘラ状 ナゲが見られる。 (2) 左右面取り、表裏面右側に粘土縦目有 り、広端部1.2cm上に巾0.5cm、長さ6.5cmの 凹縁有り。
11	平	1.9	1.4	2.3	19.0	12.3	34.4	赤褐色	細 礫 (0.2mm~1.5cm) 少量に含む	硬	6 × 7	6 × 7	(1) 印きあとわずかに残る、全体ナゲ消し。 (2) 左右面取り、布織り合せ紙あり。

表2 互別平均値表

互別 枚数	厚 度	厚 さ (cm)	重 量 (kg)	広 端 面 (cm)	狭 端 面 (cm)	全 長 (cm)	色	調	胎	土	成	格 子 目 (3cm)	布 目 (1cm)
平	64	2.3	269.9/4.2 (総重量)	27.7	25.6	39.1	灰色-11 灰白色-23 褐色-1 赤褐色-16 青灰色-13	細砂を含む礫 量-7、粗砂を 含む少量-1、粗砂を含む微 量-2、粗砂を含む少量-1 細砂を含む(2.0mm~1.5cm)微 量-14、細砂を含む(0.2mm~ 1.5cm)少量-27、細砂を含む (2.0mm~1.5cm)多量-12	堅 緻-13 硬 -23 やや軟-10 軟 -18	4 × 4-16 4 × 5-7 5 × 5-1 不 明-40	6 × 5-11 6 × 6-36 6 × 7-10 7 × 7-2 不 明-5		
坂斗	1	2.5	1.9/1.9	(15.0)	12.5	(33.0)	青灰色	細砂を含む(2.0mm~1.5cm)多 量	硬	4 × 5	6 × 7		
丸	15	1.5	31.9/2.1 (総重量)	18.7	12.2	35.4	灰白色-5 褐色-2 赤褐色-2 青灰色-6	細砂を含む礫量-1、粗砂を 含む(0.2mm~1.5cm)微量-1、 細砂を含む(0.2mm~1.5cm)少 量-7、細砂を含む(0.2mm~ 1.5cm)多量-6	堅 緻-3 硬 -7 軟 -5	不 明	6 × 5-2 6 × 6-8 6 × 7-5		

(西沢)

り取られている。凸面には布目圧痕が所々見られる。K9(挿図3)は平瓦を半載した製斗瓦で、広端面は欠損して、凹面に粘土板継目痕が明瞭に残る。K10・K11は行基葺の丸瓦である。K10は凸面右側縁に載線が見られる。凹面には特有の圧痕がある。K11は赤褐色を呈する赤瓦である。凹面には粘土板継目痕か、布合せ痕が見られる。

今回出土の瓦群で特徴的なことは、完型品が多いこと、軒瓦が含まれていないこと、特殊な溝切瓦の出土である。第1に特殊な道具瓦は未製品を含め合計8枚出土している。いずれも平瓦を成形、調整したあと焼成前に切溝を入れたものである。長さは3～4cmで、幅は2～2.4cmである。こうした特殊瓦は他に類例を見ないので、その用途については推量の域を出ないが、丸瓦の厚さがいずれも2cm以下であり、この切溝も2cmであることから、両者を組合せて利用できないものか。第2に完型品が多い点で統計の数値を出しやすい。今回はその一部のみを行った。平瓦では第1次成形技法は粘土板巻きつけ技法で、第2次成形では格子叩き目である。凸面調整手法は横方向ナデが中心で一部横と縦方向ナデが見られる。更に手掌による最終調整も多い。作りは種巻き作りの特徴を示す痕跡が多いが、未確定部分もある。糸切り痕や枠板痕は明瞭である。枠板痕は7～8枚で幅3.5cm前後である。布目痕は1cm当り6×6がもっとも多い。凸面では格子叩きは丁寧にナデ消されたものが多いが3cm²で4×4単位が一般的である。叩き方向は広端面に平行で、狭端面では斜方向で、円弧状の叩きを示す。焼成は堅緻なものが多く、色調も青灰色のものが約2割を占める。また赤瓦系も4分の1を占める。法量の平均は重さ4.2kg、広端幅27.7cm、狭端幅25.6cm、全長39.1cm、厚さ2.3cmである。丸瓦も平瓦と同様の成形技法と調整手法であるが、すべて行基葺である。法量の平均は重さ2.1kg、広端幅18.7cm、狭端幅12.2cm、全長35.4cmで厚さ1.5cmである。

藤原宮の南地区の内濠SD1400を中心とした平瓦は、粘土紐巻きつけ技法、縄目叩きが多いが、その法量平均値は当遺跡と類似する。藤原宮では全長39.1cm、広端幅29.2cm、狭端幅25.3cm、広端面厚さ21.2cmである。当遺跡の完型品のみを比較するとその値は更に近似する。SD1400から出土する坏は内面に2段放射文とラセン文をつけるものであるが、当遺跡でもこの坏と同時期の坏が瓦群と同層から出土している。この瓦群の埋没時期は現在の所、6世紀末から7世紀初頭の時期と考えられる。今後、瓦の胎土分析などから生産地や、供給先の検討を加えたい。

4. 木製品

今回はすべての整理がついていないので、その主要なものを提示した。W1～W43までは写真・実測図版を示し、W44～W69は写真図版のみを示した。

(1) SD-2 (W1～W22、W25、W41、W44～W49)

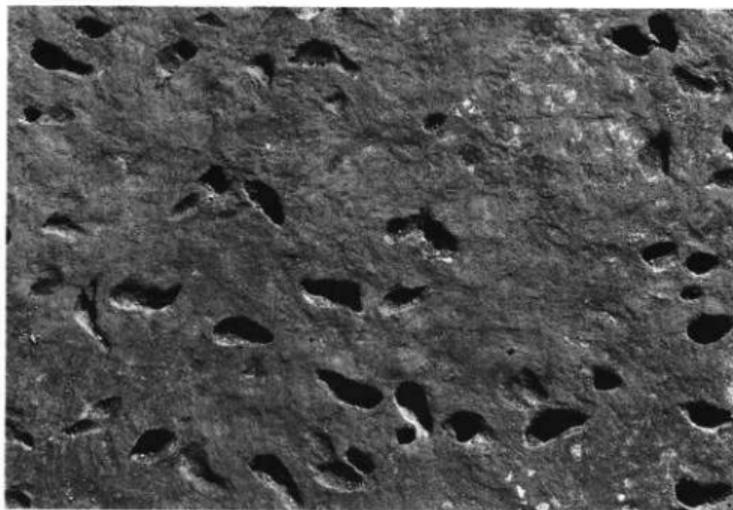
W1、W2は砧状の木製品でW1には樹皮が付着したままのため未製品であろう。W2は半截されている。W3は木鍾。W4は内面に丹塗の彩色がわずかに残る容器片である。W5はえぶり状で樹皮の補修が見られる。W6・W7は紡織具か。W8は4本以上の又楾である。W9はあかかき状になる。W10は柄は欠損しているが、一本柄の鋤状になる。W11は用途不明である。W12～W14、W25は表面が丹塗され、直径1～3mmの小孔が貫通する点で共通する。彩色はW14は不鮮明であるが、W25は頭部から裏面約2cmにも彩色されている。小孔と小孔を結ぶ糸の痕跡が表面にのみ認められ、大阪の西岩田遺跡^(註6)では2枚重ねて糸で括っていたものとされている。県下でも守山市の服部遺跡^(註7)で出土例があるが、用途については祭祀用の武具が考えられる。W15は鳥形に似るが図左部分は断面方形をなし、さらに伸びることも予想され、柄の握りとも思われる。W16は突起をもつ朝物の容器であるが、舟形にも似る。W17は用途不明品、W18は剣形で表面中央に樋があり、関部は莖を中心に左右に開く。莖部は欠損しているが更に伸びる。W20は用途不明品であるが内彎して高環や鉢に似るが、表面の段部分と上方に小孔が認められる。W21～W24は石庵丁形の木製品である。(W23、W24は古墳時代の包含層から出土した)。形状はほぼ平行四辺形で、背部が厚く、刃先は薄くなる。背の近くには2孔一対の円孔が穿たれるが、W24は欠損して1孔のみ認められる。また円孔を結んで溝が背と平行して彫られている。木取りは背に対し60°～50°で木目が認められ、弥生時代のものほど鋭角である。県下の出土例は「針江北遺跡の調査」^(註8)でまとめられ、その機能について穂摘具とは異なるとしている。本遺跡出土の石庵丁形木製品は全国の出土例^(註9)とその形状は類似している。県下でも低湿地の調査に伴い出土例はさらに増加すると思われ、その使用法と系譜の総合的検討が進むだろう。W41は又楾、W44は長さ40.5cm、厚さ1.9cmの板材、W46は長さ48.6cm、厚さ6.8cmと大型で内彎している。W47は表面に丹塗を施し、左部分は火を受けている。やや内彎する朝物か。W48は長さ20.4cm、W49は長さ11.9cmとともに用途不明品

である。W45は砧で全長31.6cm、最大幅8.5cmある。

(2) 足跡遺構 (W26、W34、W43、W50～W52、W58、W69)

足跡層からはW34、W43、W50～W52、W58が出土している。W34は糸巻の梓木か農具のあて具状木製品である。W43は丸鋏であり、着柄角は150°～155°と鈍角である。頭部には断面三角の突起を削り出し、その左右に小孔を穿ち、刃部にも長方形の柄つば状の穿孔を持つ。着柄角からえぶりの使用されたか、低湿地用の鋤とも考えられる。W50は長さ35.7cm、厚さ4.0cmで頭部に方形の小孔が認められ、側面は半円形にカットされている。W51は長さ31.5cm、厚さ2.8cm、幅14.0cmの着柄鋤である。W52は長さ42.8cm、厚さ4.3cmで「おおあし」の梓木か、馬鋏と思われる。W58は櫃で長さ152.5cmと長大でほぼ完型品である。

足跡の被土層からW26の広鋏が出土している。この広鋏で特徴的なことは舟形突起の反対面に別製のあて板を用い、柄穴には長さ2cmと2.5cmの木釘と厚さ0.4cmのクサビで着柄を補強している。類例は富山県の江上A遺跡にあり、黒崎直氏の分析がある。W69は両端が欠損する紡織具の一種か。



挿図4 足跡出土状況

(3) SD-3 (W33、W38)

W33は下層から出土したが、両端に3個ずつの小孔を穿つ。W38は上層から出土した。滑車状の木製品であるが、片側に深さ1.5cmの穴を穿ち、中に長さ1.8cmの回転つまみを挿入している。中央の円孔に軸を入れ、糸巻き等に利用したものだろう。

(4) 包含層

包含層出土木製品には古墳時代前期のものと古墳時代後期のものに大別できる。

古墳時代前期の木製品には次のものがある。W29は舟形木製品の軸部と思われる。残存長26.2cmで最大幅は6.3cmある。軸部下の舷には完通する小孔が穿たれている。こうした例は静岡県山木遺跡や、縄向遺跡、大阪西岩田遺跡にも見られる。弥生時代の舟形木製品については久保寿一郎氏の研究がある。W30は小型の砦で、一部使用痕が見られる。W32は小型糸巻きで、中央部の穿孔がない点で未製品か。W36は楕形木製品。W37は下半は欠損しているが楕形か浮子とも思われる。W35は用途不明品。W39は二股の組合せ鉾の半身である。残存長が59.5cmと長く低湿地に向く。W40は鳥形に似るが欠損して不明である。W42は剣形木製品で柄頭に刻み目を持ち、握部には直径3mmの小孔が貫通している。W56は壱杵の完型品で全長96cm、把手の直径3.2cm、杵先で直径8.2cmである。W64は丸鉾の半身で残存長21cm、厚さ1.2cmで柄穴がわずかに残る。W65は着柄する鉾で全長41.2cm、厚さ1.1cm、最大幅17cmである。

以下は古墳時代後期の包含層から出土した。図26の木器群から出土した遺物は次のものがある。W27はあかかき状木製品、W31は鞘状木製品で本体は三日月状になり弧の部分は薄く削られ刃部状になる。弦は上から約2cm彫り削られ、その溝内に刀子状の木片が挿入されており、3条の樹皮で皮綴じされている。W53、W54は方形と円形の穿孔をもち、それぞれ長さ28.4cm、厚さ1.5cm、長さ38.8cm、厚さ1.7cmの板材である。W59～W61は柄である。W59は長さ83.5cmで長柄鋤で身は一部が残存する。W60は長さ44.4cm、把手幅8.4cmの方形で、柄部は直径6cmで、長柄鋤の柄である。W61は柄の中央部と上部に2対の穿孔があり、皮綴じが残存している。彎曲する内彎側の皮綴じがどちらも切断されていることから、2本以上の柄を用い、内彎側に横木を柄と直角に連結して踏み鋤などに利用したものだろう。W62は着柄鋤の先、W63は方形の盤で長さ31.8cmで幅14.3cmであるが残欠である。裏面には把手状の突起が1ヵ所見ら

れる。W66は着柄鋤で長さ32.3cm、厚さ2.3cm、最大幅10.4cmである。

以下は木器群以外の包含層から出土した。W28は中央に直径0.6cmの円孔が2個ある。W55は長さ55.1cm、最大径1.8cmの杭状木製品の完型品で、頭部下を細く削り込み先付けをする。W57は全長90.8cm、身の厚さ2.2cmの櫂である。W67は全長50.5cmの櫂状木製品で身の厚さ2.0cmで、柄の断面は方形である。身の表裏とも刃部を鋭く削り出しているため鋸状農具とも考えられる。W68は全長32.3cmの櫂先である。

註1) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ』

註2) 出辺昭三『陶器古窯址群Ⅰ』（平安学園考古クラブ研究論集10）1966

註3) 註1)と同じ

註4) 藤沢一夫、西田弘先生の御教示による。

註5) 註1)と同じ

註6) 村上年生、石神幸子他『西岩田』（財）大阪文化財センター、1981

註7) 大橋信弥、谷口徹『服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ』滋賀県教育委員会、守山市教育委員会
滋賀県文化財保護協会 1984

註8) 尾崎好則他『針江中遺跡の調査』『国道161号バイパス関連遺跡調査概要』1983

註9) 工業普通『木製徳撫具』『弥生文化の研究』5、雄山閣 1985

註10) 上市町教育委員会『江上A遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告』1984

註11) 黒崎直『くわとすき』『弥生文化の研究』5、雄山閣 1985

註12) 註6)と同じ

第4章 結 び

赤野井湾は旧野洲川の二大支配と考えられる法竜川と境川にはさまれた地域である。明治26年の地形図では、法竜川河口には三角洲が形成され、一方の鳥丸崎半島も琵琶湖に突き出ている。この半島やデルタの成立時期は明確ではないが、半島の先端から弥生時代中期の玉造工房や方形周溝墓群が出土している点から弥生時代以前に成立していた。また、法竜川河口では59年度の試掘調査で水面下2.8m前後で縄文時代後期の資料が発見されている。両遺跡とも現在の水面下に位置することから、低水位での遺跡の立地を考えねばならない。

湾の後背地の遺跡では現在の汀線から500m以内に赤野井浜遺跡、杉江北遺跡、小津浜遺跡、山賀西遺跡がある。赤野井浜遺跡では弥生時代前期の土器が出土している。^{註1)}遺跡は湖面から約1.5cmの高さで、地表下1mの黒色有機質土中から出土した点で、

84.80m前後の高さであろう。杉江北遺跡では85m前後で8世紀末から9世紀前半の遺構が検出されている。^{註2)}小津浜遺跡では弥生時代前期の遺物が出土している。また、山賀西遺跡^{註3)}では微高地に奈良時代からの遺物が見られ、湖岸よりでは弥生時代にかけての遺物が見られる。

湖岸から500m以上では、杉江遺跡^{註4)}、赤野井遺跡^{註5)}などがあり、古墳時代後期から中世にかけての遺構が検出されている。

南湖東岸一帯に視野を広げて見た場合はどうであろうか。現在各地で調査が続けられ、湖岸や湖底での遺跡の存在が明らかにされつつある。

志那湖底遺跡は草津市志那町の湖岸から湖底にあり、南は葉山川河口付近から、北は津田江湾付近までの広大な湖底遺跡である。昭和初期銅鐸が出土したことで有名であるが、58年度の水中分布調査で、縄文時代から弥生時代までの遺物の分布が認められた。58年度の湖岸堤の試掘調査では、平湖西岸と前浜との間の、水面下2mで縄文時代晩期の深鉢の底部や、口縁部などが検出されている。また59年度の葉山川沖400mの志那湖底南端確認調査では、30×50mで締切った調査区で、泥炭層の下層の砂層を切り込んで、三基の土壌が検出された。一基は幅約1.8mで楕円形をなし、深さ40cmの土壌で、深鉢の口縁部が11個体分出土している。他の二基は深鉢が2個体分ずつ出土し、土圧で細片化していたり、削へいを受けているが、壟棺墓と思われる。土器はいずれも縄文時代晩期の滋賀里Ⅱ式の一括遺物である。遺構は水面下1.8～2.0mで検出された。

また、葉山川河口から南へ約500mの七条浦遺跡では、58年度の湖岸堤の調査で水面下1.2～1.3mで弥生時代中期を中心とする土器や木製農具^{註6)}が出土している。

さらに南の矢橋湖底遺跡では水面下2.4m前後で縄文時代中期の船元、里木式土器がプライマリーな包含層として出土している。^{註7)}

琵琶湖が瀬田川となる直前の粟津貝塚では水面下2.6～3.6mで貝層が検出され、縄文時代早期の押型文土器から、前期初頭と中期前半を中心とした時期の遺物が出土している。^{註8)}

今回の調査では水面下1.5～1.8mで遺構が検出された。弥生時代後期の遺構面で、水面下1.8mであり、古墳時代後期の溝で水面下1.7m、白鳳時代の瓦が1.5m前後である。

赤野井湾を中心にして東西、南北のX・Y軸について遺跡の立地条件と遺物の出土状況を概観し、そこにZ軸方向に遺構や出土遺物の時期を加えてみた。南北方向では湖岸に添って北から赤野井湾の法竜川河口で水面下2.8m前後で縄文後期、天神川河口で水面下1.8mで弥生後期、水面下1.6mで白鳳瓦、志那湖底遺跡南端で2.0mで縄文晩期、矢橋湖底では2.4mで縄文中期、大江湖底で水面下2.0mに縄文前期、西岸ではあるが南端の栗津貝塚では水面下2.6~3.6mで縄文早期から中期の遺構または包含層が検出されている。

南北軸の遺跡の立地は葉山川沖が湖岸から400mと遠いがいずれも500m以内である。南北軸と時代を重ねて見ると、縄文時代が水面下2.0~3.6m、弥生時代が水面下1.2~2.0m以内、古墳時代以降の資料は少ないが、北山田湖底の1.8m前後で須恵器が出土しているほか、七条浦でも平安時代までの遺物が水面下1.2m以上で出土している。今回の調査では8世紀初頭以降の遺物は見られない。

次に今回の調査地を中心に水中から陸上の東西軸で考えてみる。陸上部の湖岸からもっとも近い山賀や杉江北でプラス50cm前後で弥生時代の遺構があり、マイナス1.9m前後で弥生時代の遺物が出土している。弥生時代以降は奈良時代末まで遺構の出土は見られない。弥生時代前期の遺跡では湖岸から約2.0km内陸部の寺中遺跡があるが、遺構面は86mと高い。また、湖岸から沖に向っての調査は現在進行中であり、その結果を待ちたい。今回の調査で水面下4.0mで火山灰層と見られる灰色の細砂層が出土したが、湾内沖の試掘調査でもアカホヤ火山灰と見られる地層がある。湾沖では早期の押型文も出土していることから、水面下4.0m以下まで包含層が続くことも考えられる。また今回の調査の水面下2.9mでは縄文時代の土器片と巨木が出土している。

東西軸に年代軸を加えると、湾沖1km以内で水面下4.0mまでの縄文早期の包含層が考えられ、湖岸沖50mでは2.9m前後まで縄文時代の包含層があり、水面下1.8m前後で弥生時代となる。さらに内陸部500m以内でマイナス1.9m前後からプラス0.1mで弥生時代前期、プラス0.5mで弥生時代後期の遺構や包含層が見られる。しかし、その後は平安時代初めまで明確な遺構は見られない。

以上のように赤野井湾遺跡とその周辺の遺跡や、南湖東岸の湖底遺跡を考えると、低水位での遺跡の立地を考えねばならない。水位上昇の原因については、瀬田川の隆起、瀬田川入口付近の土砂の堆積、地殻変動に伴う土地の沈降などが考えられている

が、現時点で明確な解答を出すことはできない。当遺跡では南湖東岸に見られる湖底遺跡と同様に水面下2.0m前後の弥生時代から古墳時代までの層位にある。また、古墳時代と弥生時代の溝の性格は、旧野洲川の支流が現在の境川周辺を流れていたとすれば、支流から湾内に流れこむ細流であろうか。弥生時代から古墳時代、赤野井湾周辺は低湿地の水田耕作には極めて困難な立地であったが、田舟や權を利用して水田耕作を営み、湖岸周辺には基城をつくり、内陸の微高地に安定した集落を形成したものでろう。今後、本格的整理と周辺遺跡の調査で新たな事実が発見されるだろうが、本調査が湖底遺跡の調査、研究に寄与することを願いたい。

註1) 山崎秀二「遺跡分布調査報告書」守山市教育委員会 1977

註2) 小竹森直子「杉江北遺跡」「泉宮かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-4」滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1985

註3) 註1)と同じ

註4) 小竹森直子「中世の集落跡」「滋賀文化財だより」A6 101 1985

註5) 滋賀県教育委員会「滋賀県文化財調査年報」(昭和51年度)1978

註6) 丸山竜平「志那湖底遺跡発掘調査」「びわ湖と文化財」水資源開発公園 1984

註7) 大橋信弥「矢橋湖底遺跡第二次調査」(以下註6)と同じ

註8) 丸山竜平「栗津遺跡発掘調査」(以下註6)と同じ

註9) 大橋信弥「北山田湖底遺跡試掘調査」(以下註6)と同じ

註10) 大橋信弥「吉身中遺跡発掘調査報告書」第V章、滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1982

註11) 山崎秀二、岩崎茂「守山市遺跡調査報告書」第11冊、守山市教育委員会 1982



調査地全景(南西から)



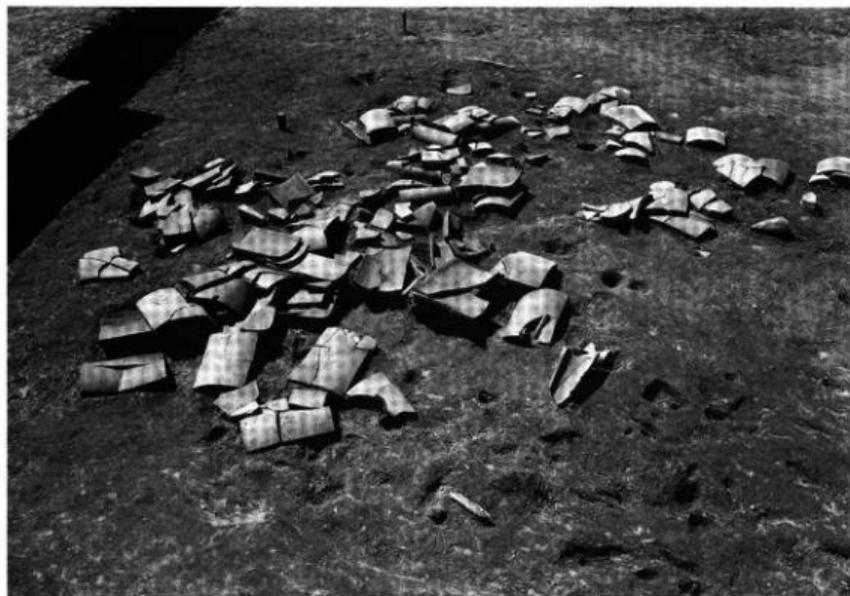
SD-2、SD-3(南西から)



足跡(北東から)



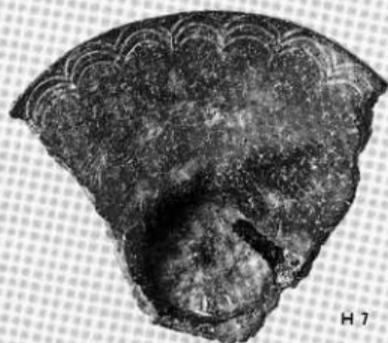
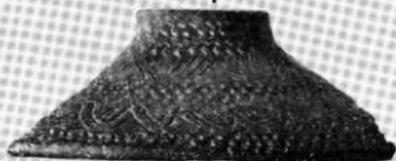
SD-1、瓦出土状況(北東から)



瓦出土状況(北から)



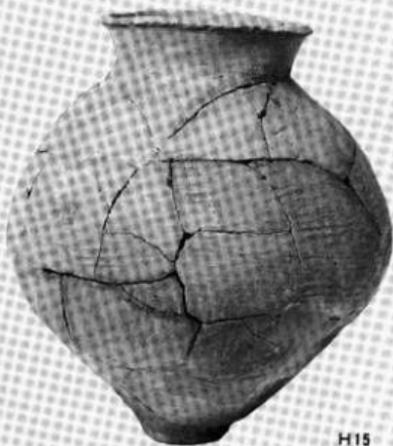
木器出土状況(北西から)



H 7



H 13



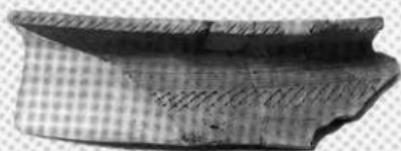
H 15



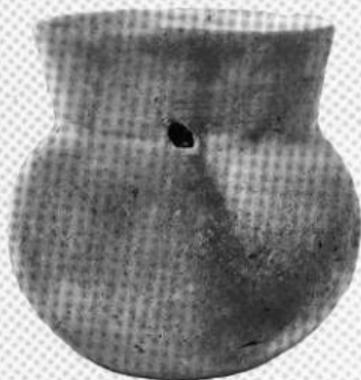
H 11



H 12



H16



H50



H18



H54



H49



H63



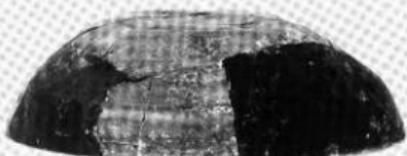
S 2



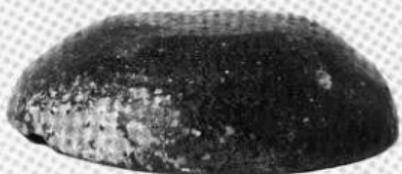
H48



S 6



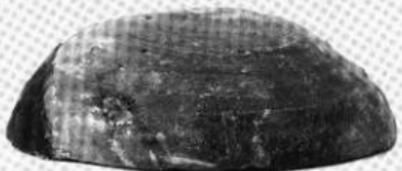
S 10



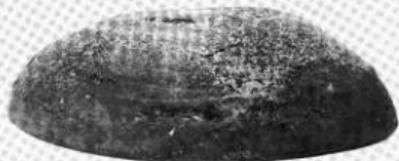
S 12



S 7



S 14



S 13



S 19



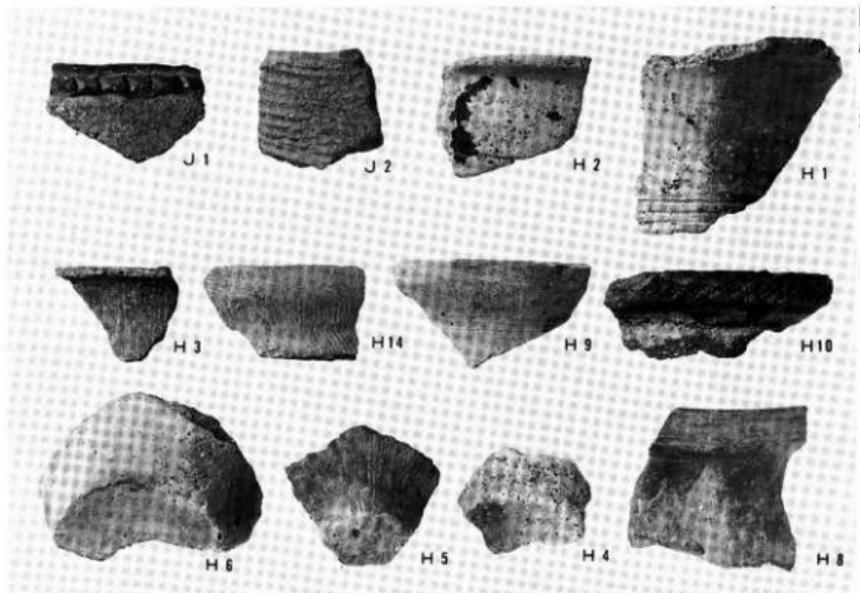
S 17



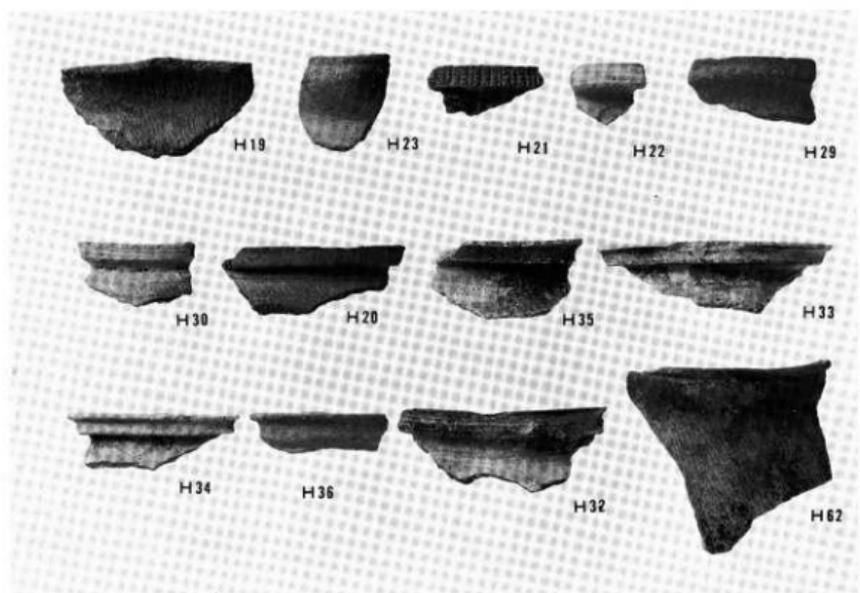
S 21



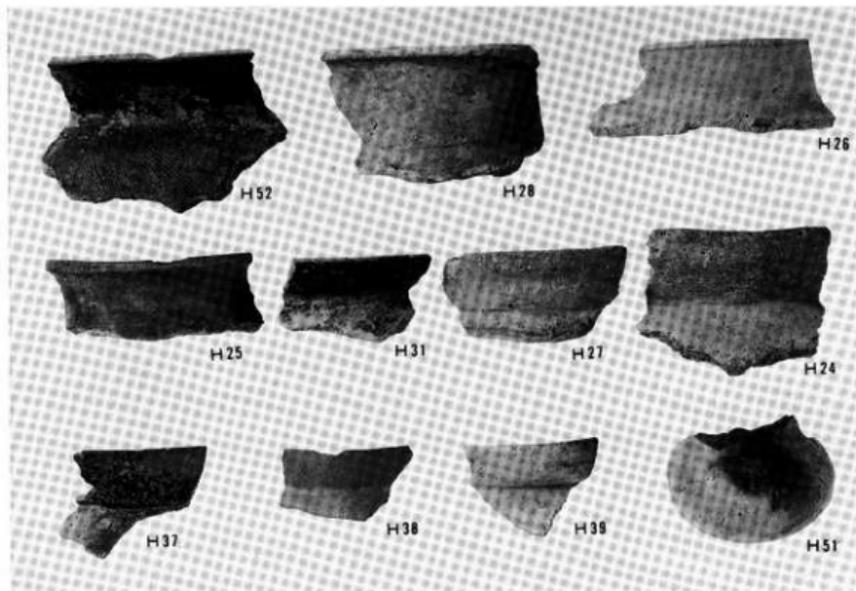
S 22



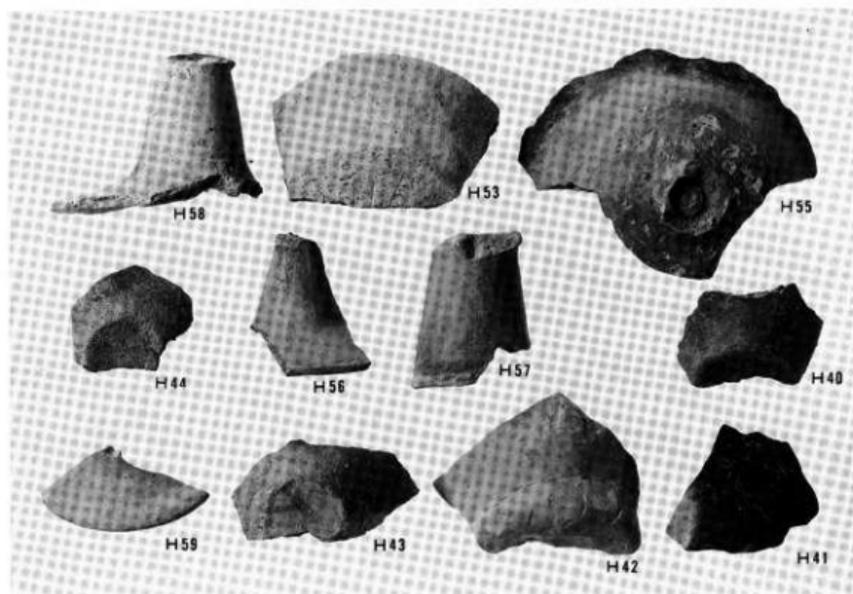
SD-2出土



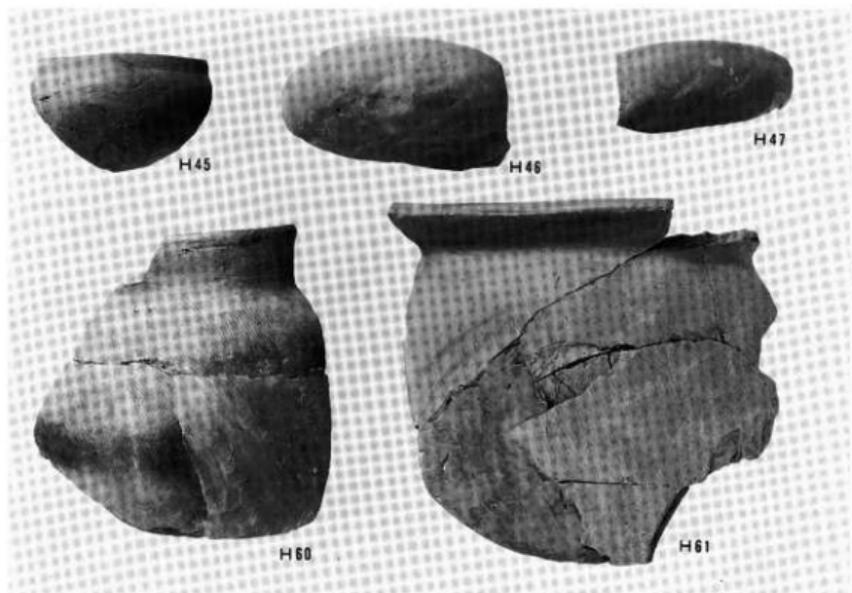
SD-3出土



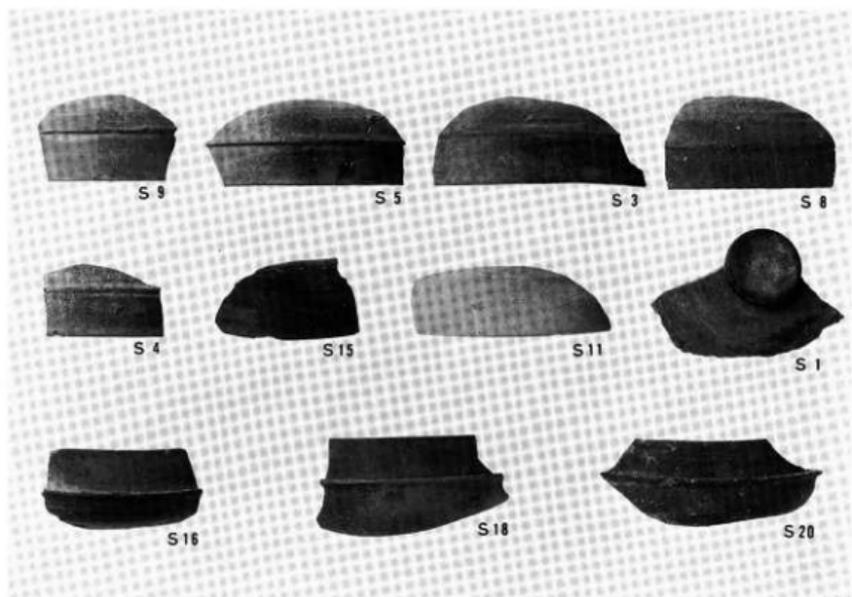
SD-3出土



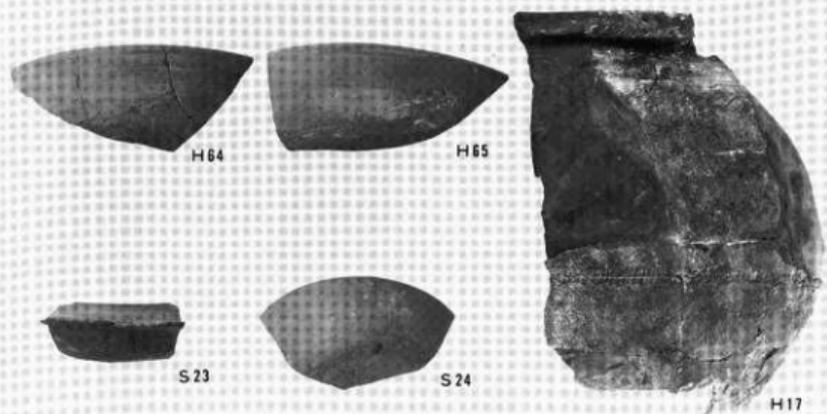
SD-3出土



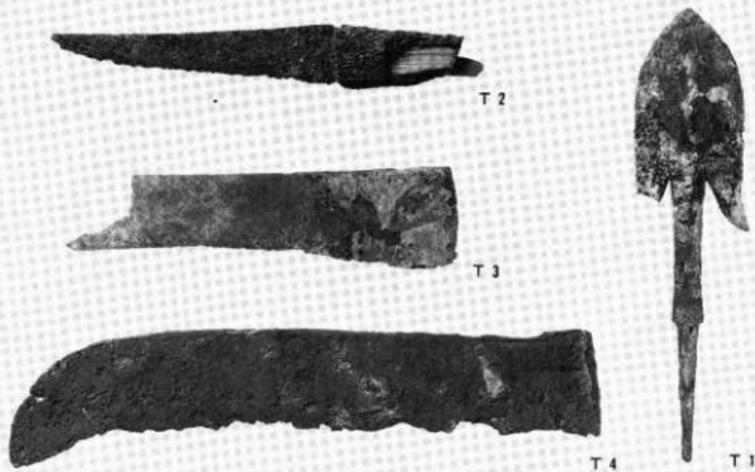
SD-3出土



SD-3出土



瓦群、足跡遺構



T1~T3 SD-3出土、T4 包含層出土



K 1



K 2

凹 面



凸 面



K 3



K 4

凹面



凸面



K 5



K 6

凹面



凸面



K 7

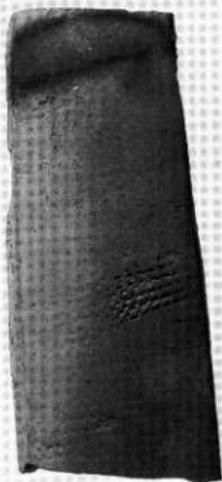


K 8

凹面



凸面



K 9

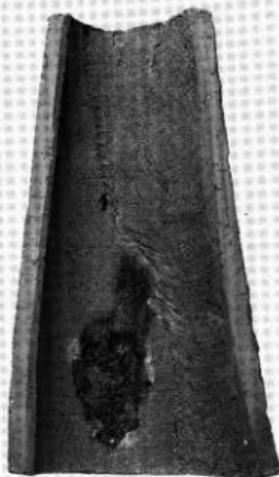
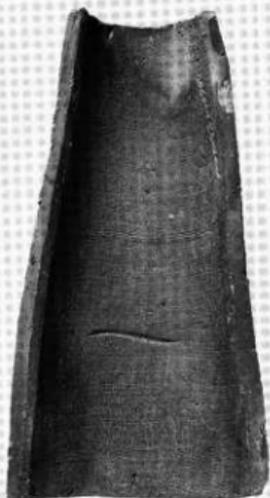


K10

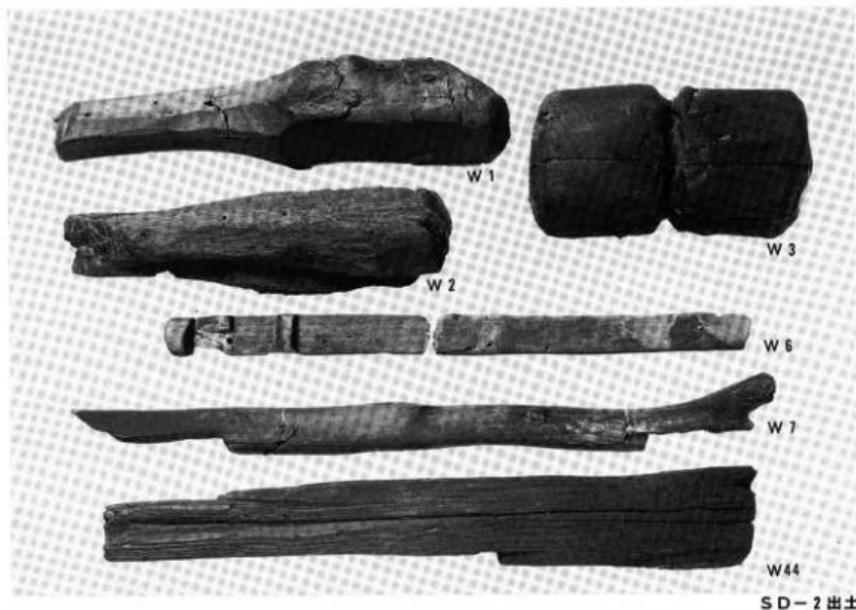


K11

凸面



凹面



SD-2 出土



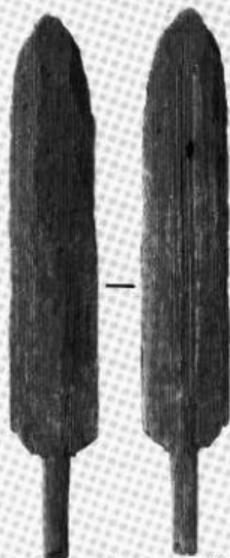
SD-2 出土



W5



W18



W17



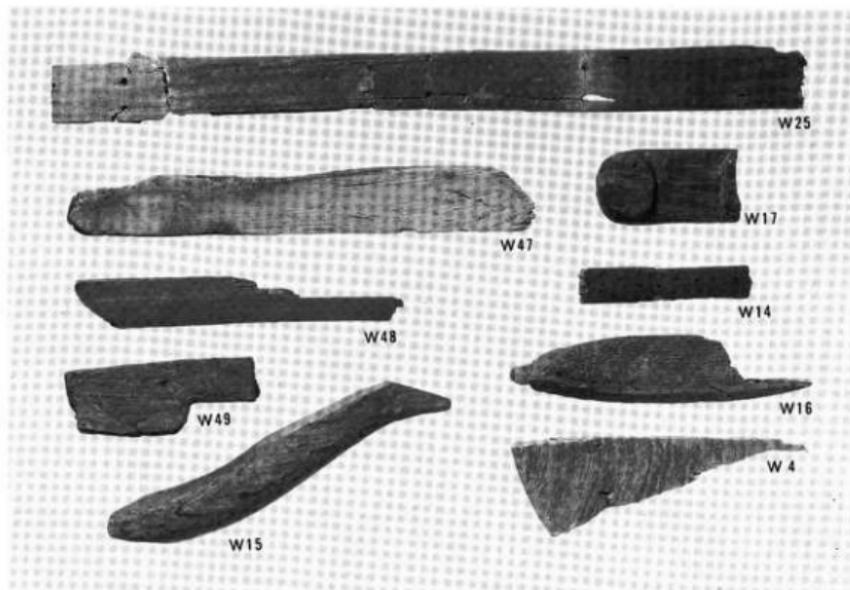
W46



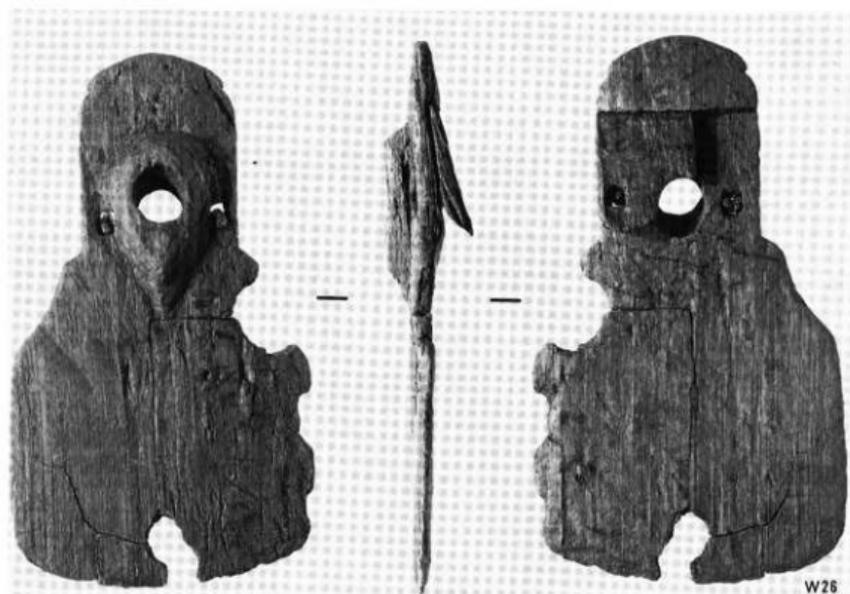
W12



W13



SD-2 出土



足跡遺構出土

W21

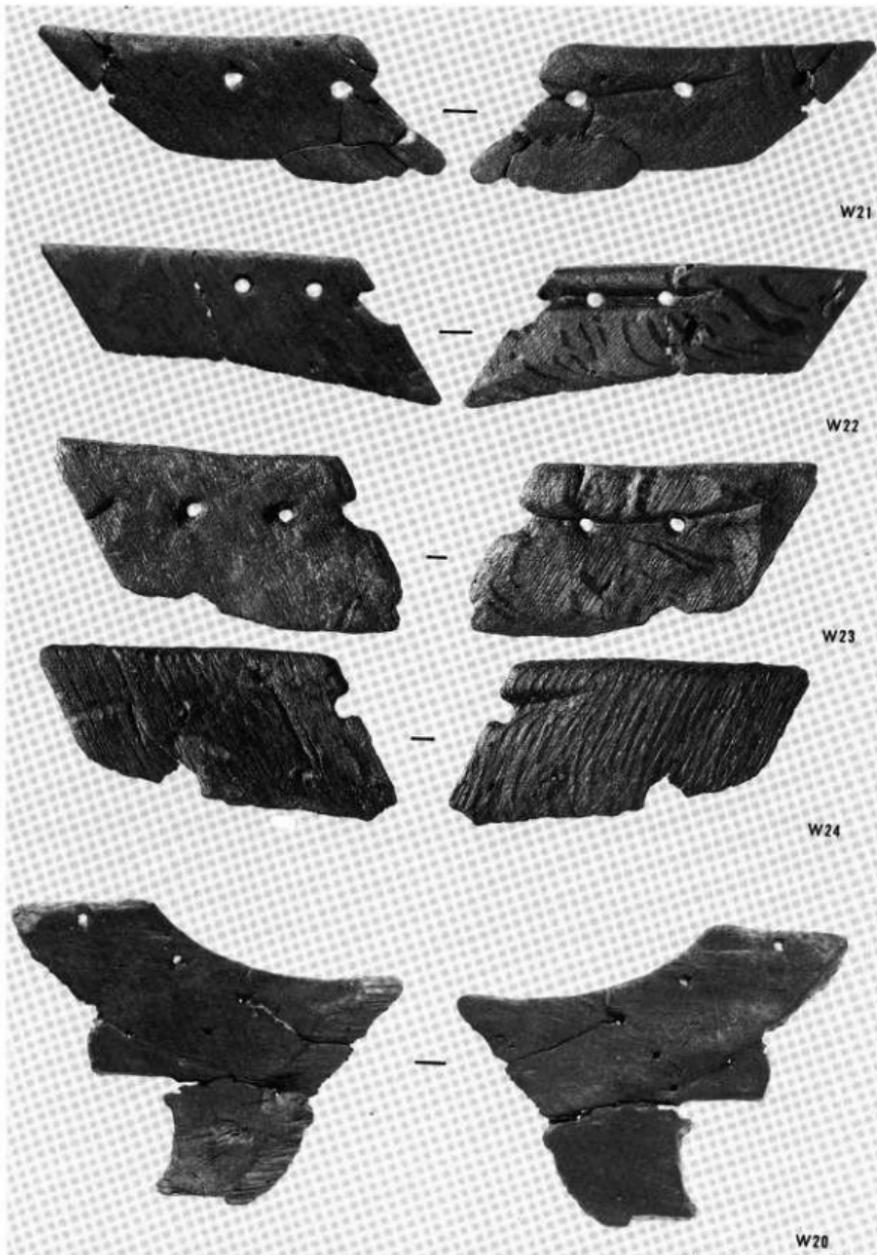
W22

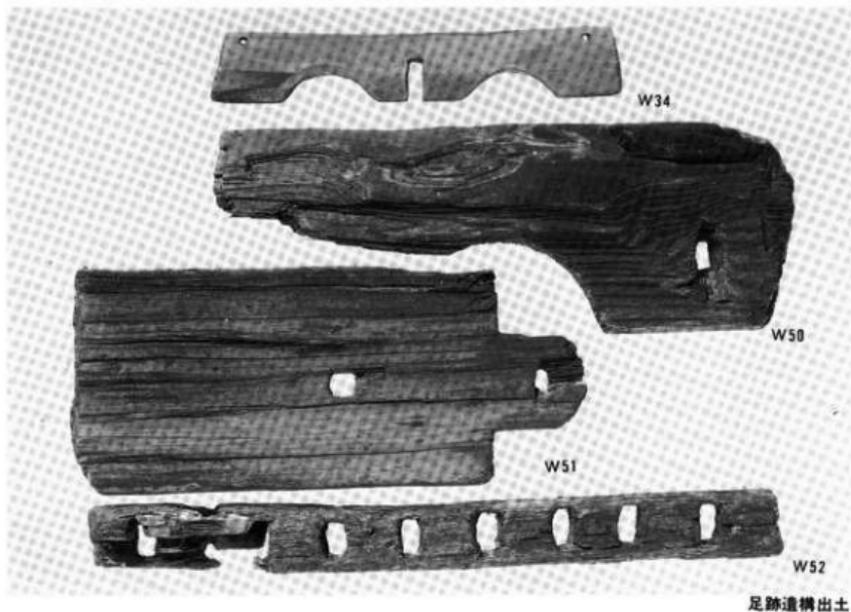
W23

W24

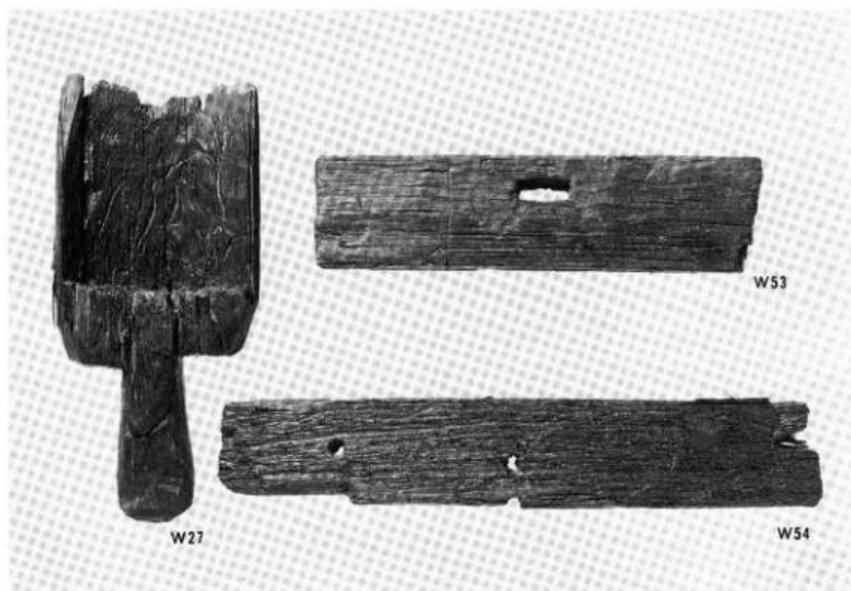
W20

SD-2 包含层(W23、W24)出土





足跡遺構出土



包含層出土



W35



W38



W69



W40



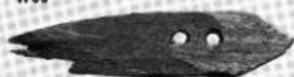
W30



W36



W37

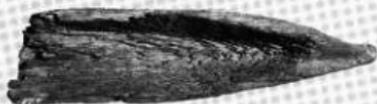


W69

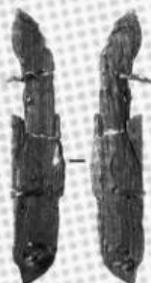
W40



W28



W29



W31



W32

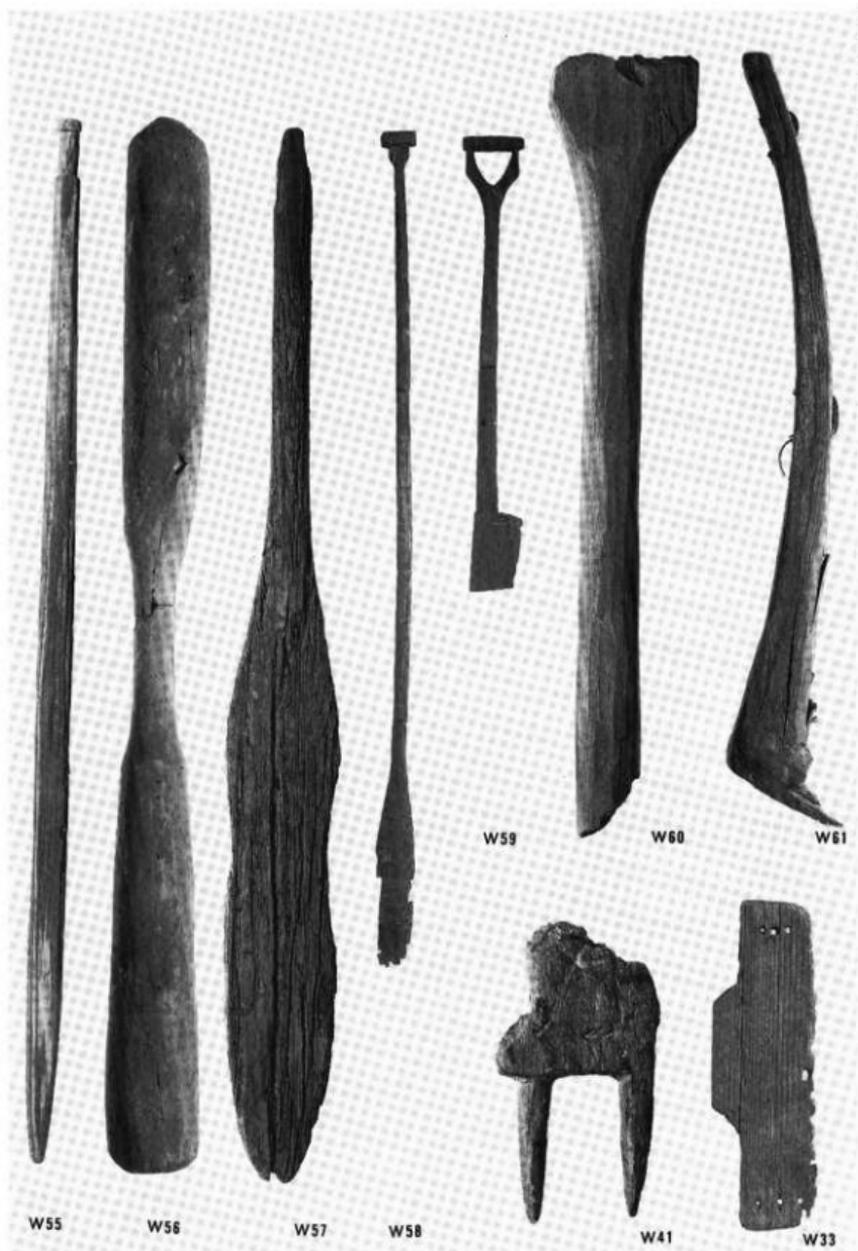


W39

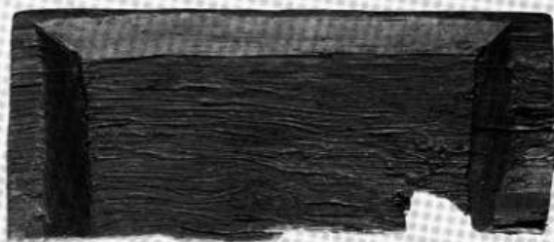


W42

SD-3 (W38)、足跡遺構 (W69)、包含層出土



SD-2 (W41)、SD-3 (W33)、足跡遺構(W58)、包含層出土



W63



W62



W64



W43



W65



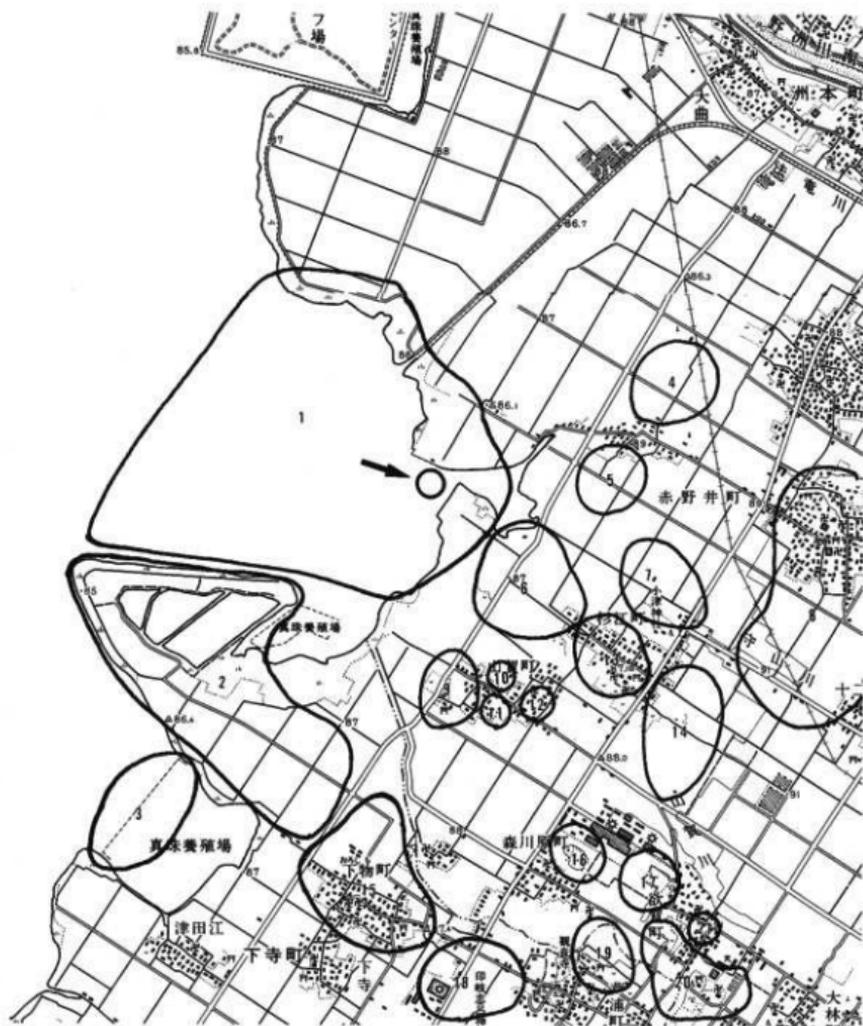
W66



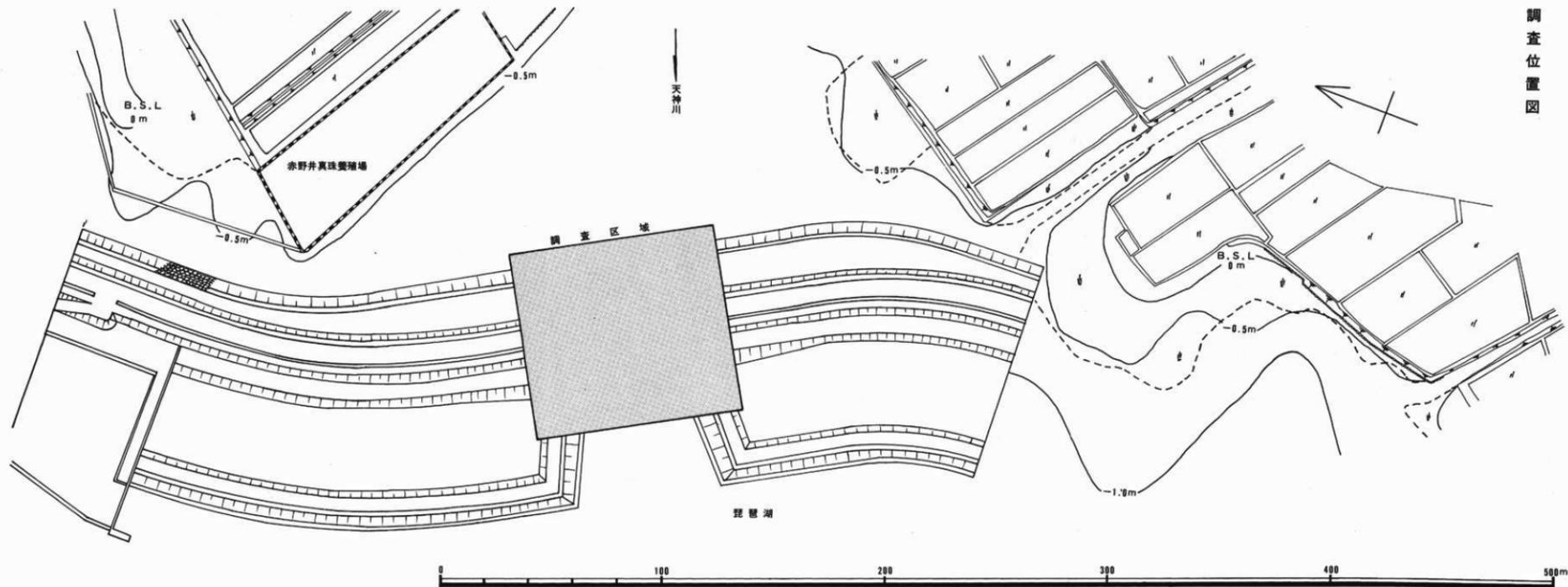
W67



W68

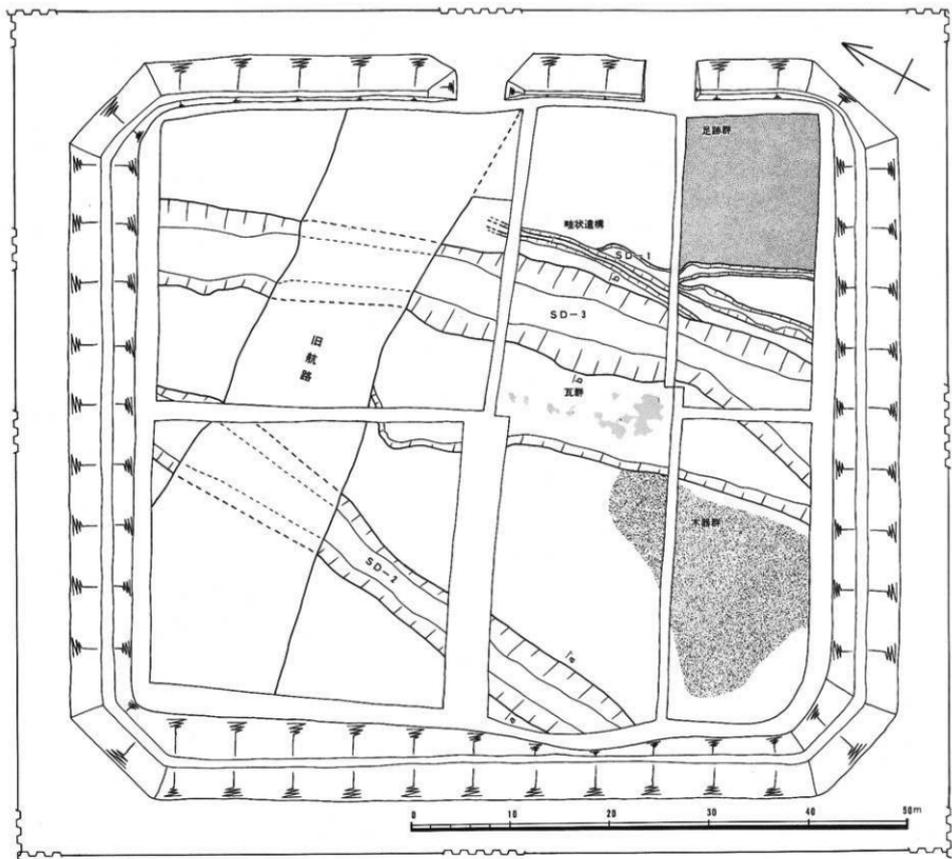


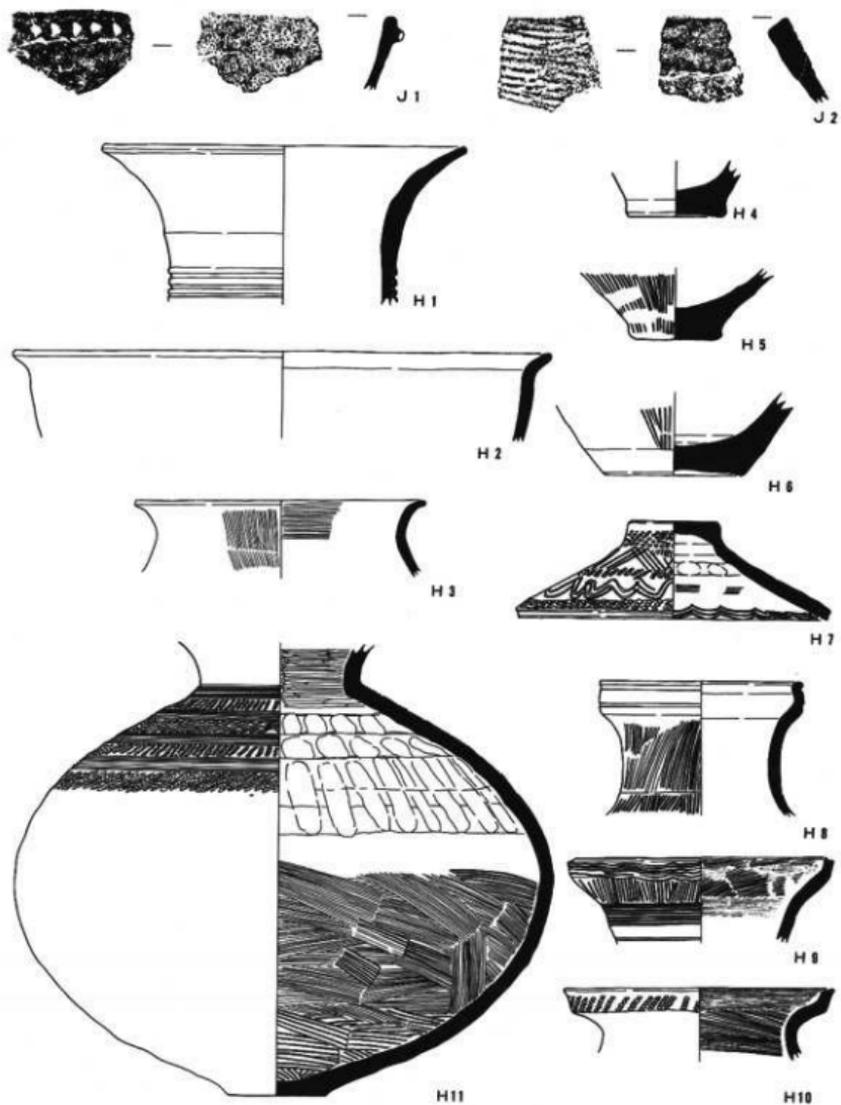
- | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|
| 1. 赤野井湾遺跡 | 2. 烏丸崎遺跡 | 3. 津田江湖底遺跡 | 4. 弘前遺跡 |
| 5. 赤野井浜遺跡 | 6. 山賀遺跡 | 7. 杉江北遺跡 | 8. 赤野井遺跡 |
| 9. 山賀西遺跡 | 10. 昌寿院遺跡 | 11. 正業寺遺跡 | 12. 仁願寺遺跡 |
| 13. 杉江遺跡 | 14. 杉江東遺跡 | 15. 下物遺跡 | 16. 森河原遺跡 |
| 17. 欲賀寺遺跡 | 18. 印岐志呂遺跡 | 19. 花摘寺遺跡 | 20. 欲賀遺跡 |
| 21. 冬塚遺跡 | | | |



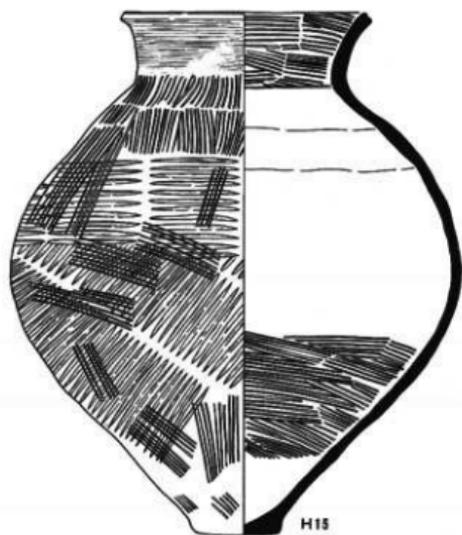
調査位置図(昭和60年11月現在)

図版 26
遺構平面図





0 5 10 20cm



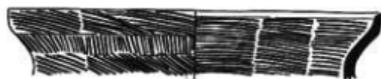
H15



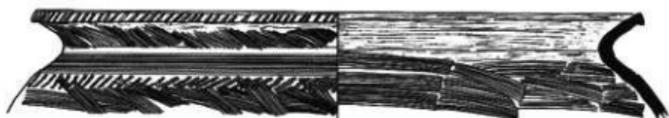
H12



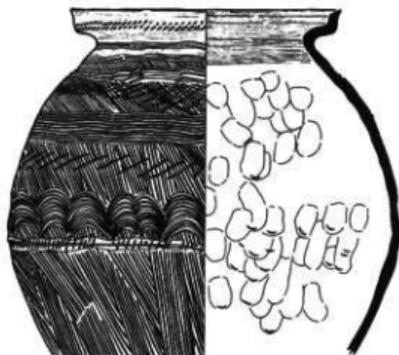
H13



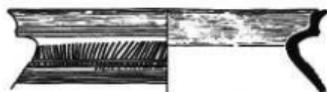
H14



H16



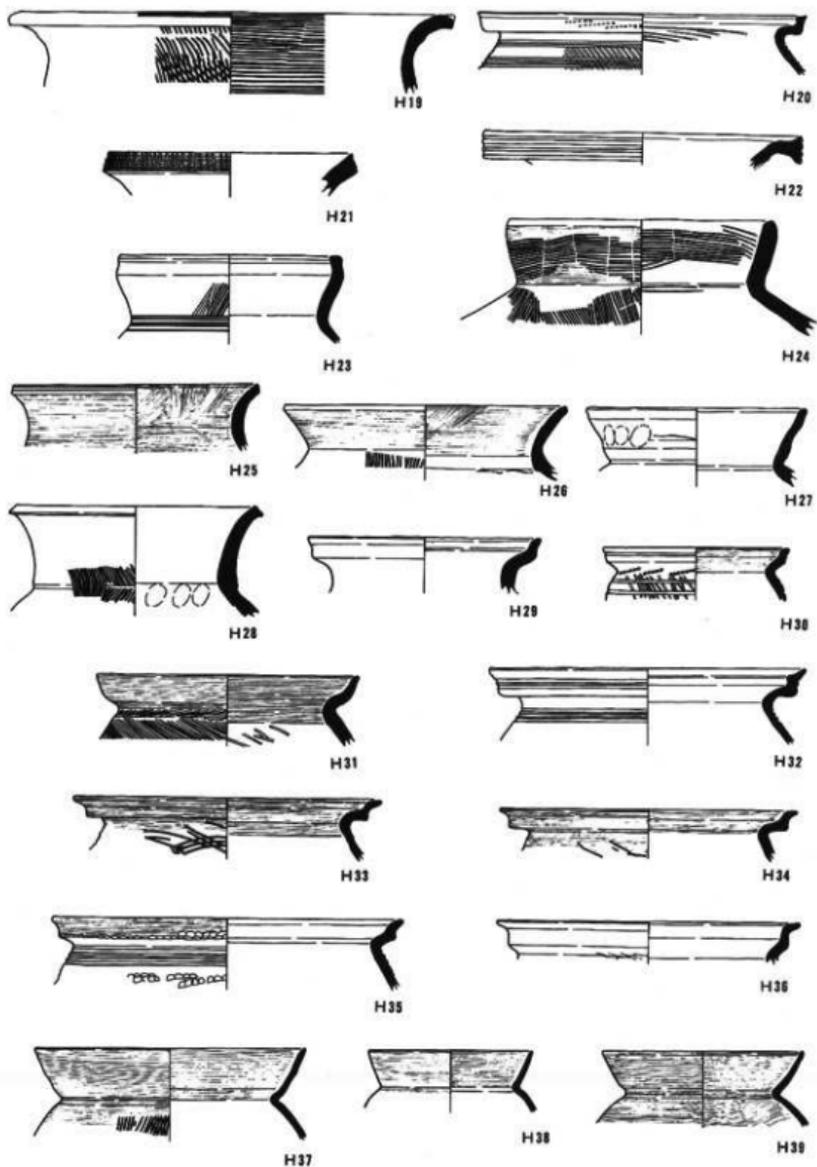
H17



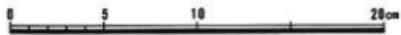
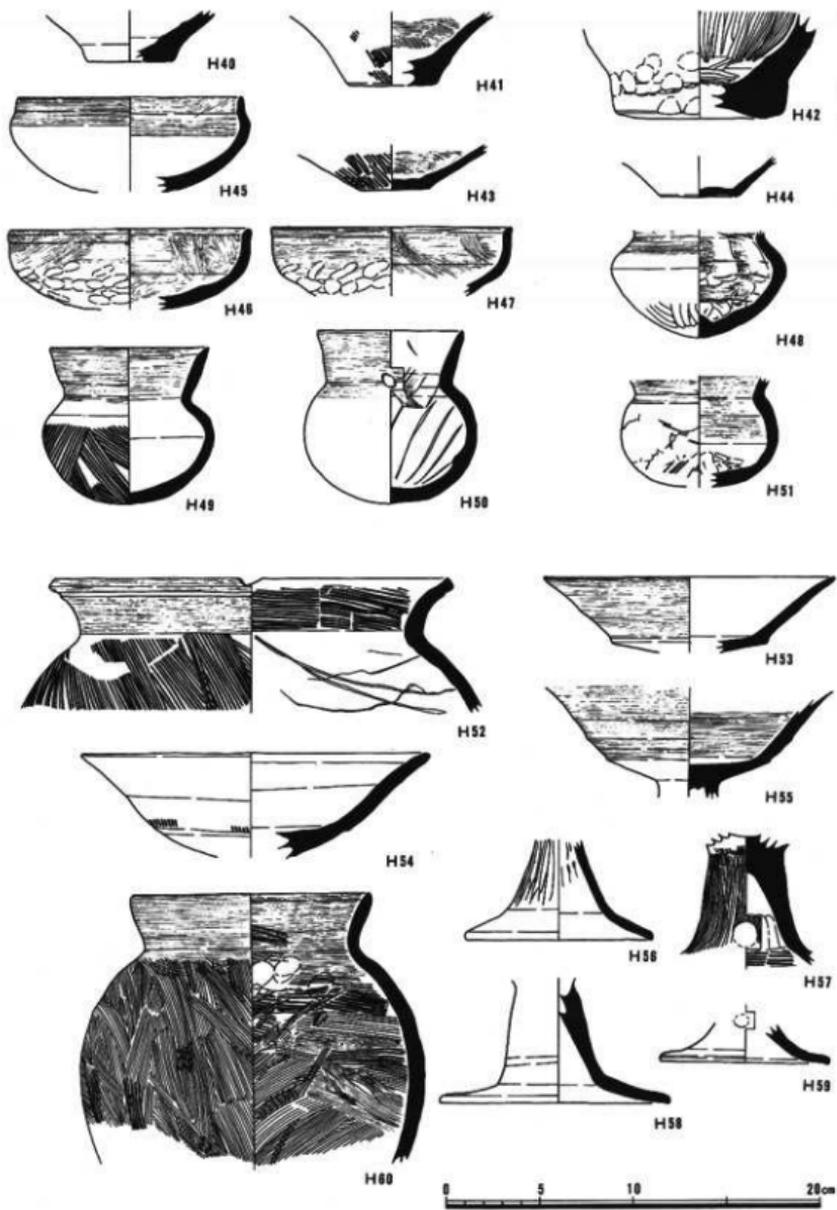
H18

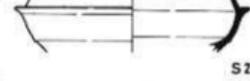
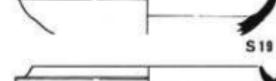
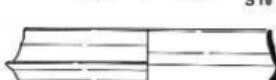
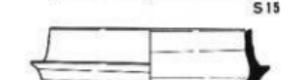
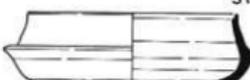
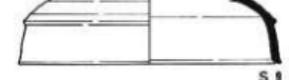
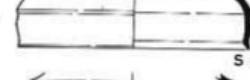
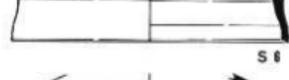
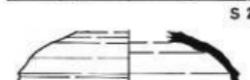
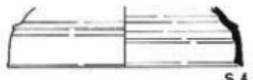
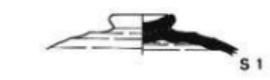
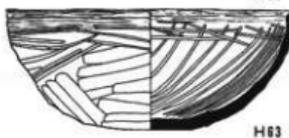
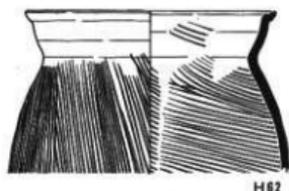
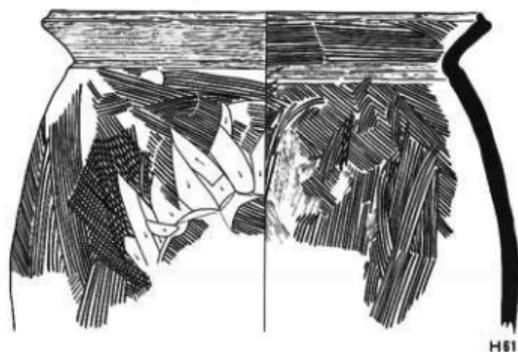


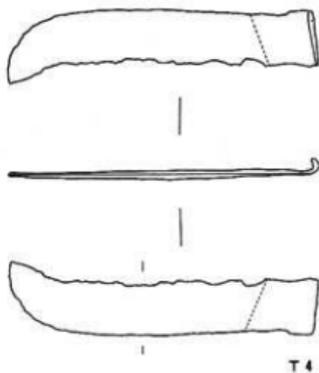
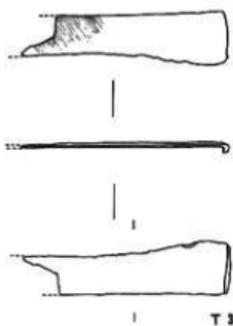
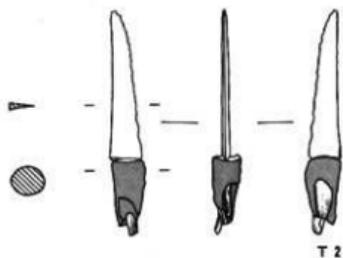
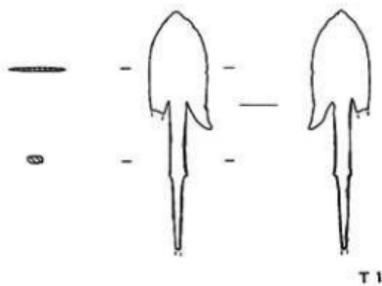
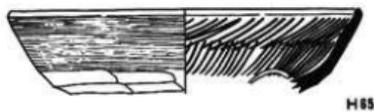
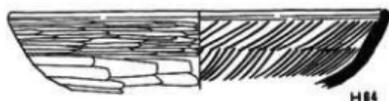
SD-2 足跡層(H17、H18)出土

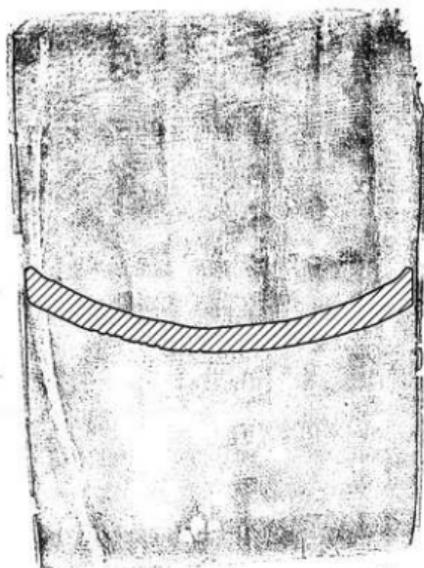


0 5 10 20cm

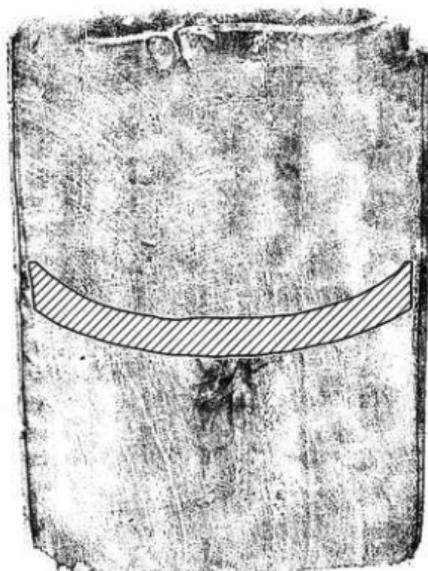




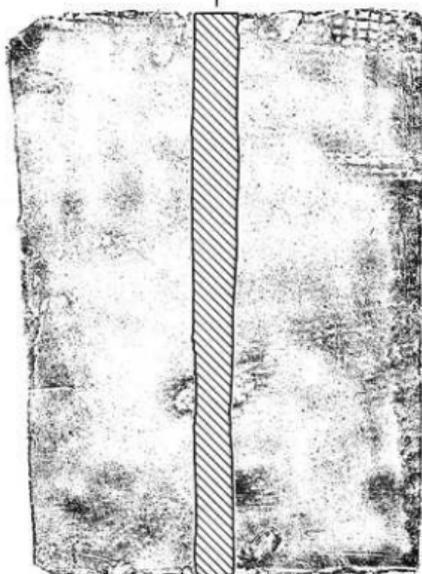
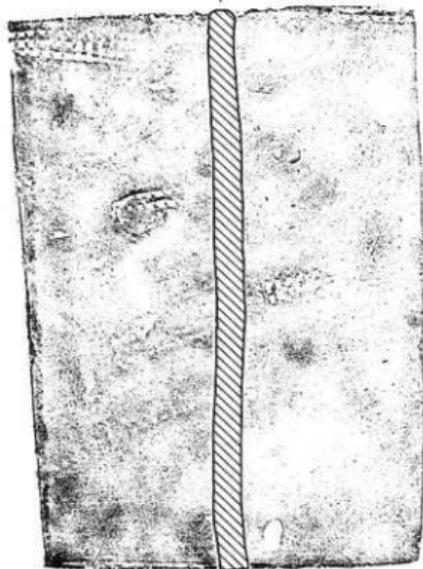


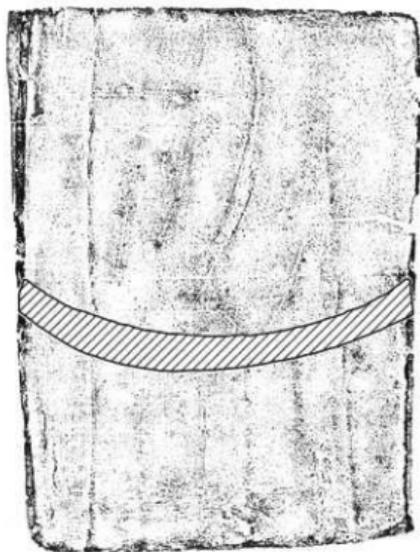


K1

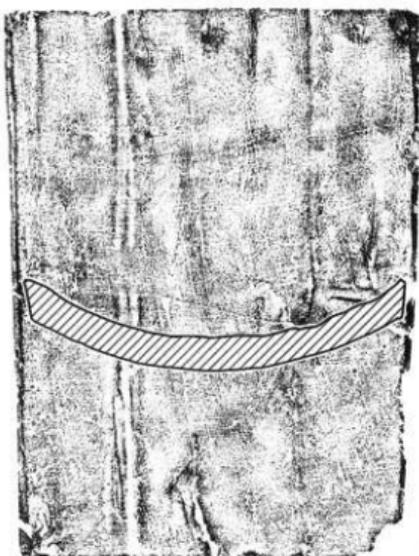


K2

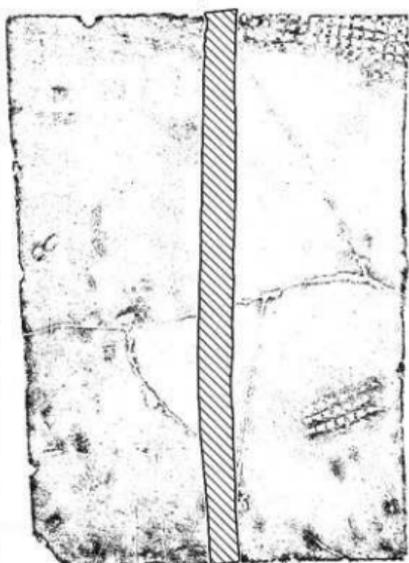
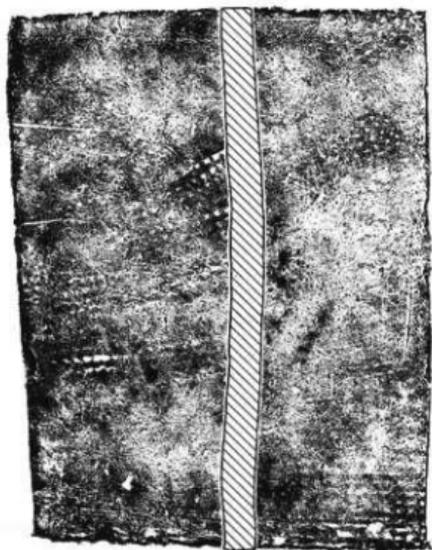


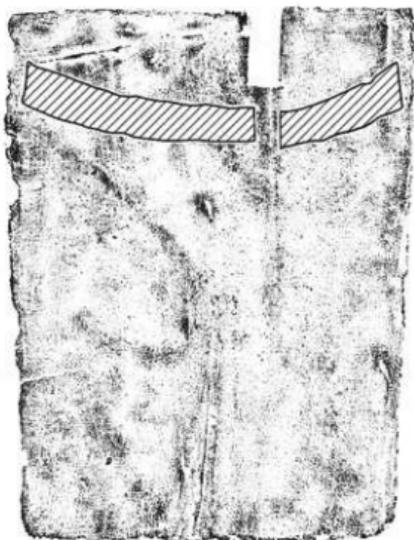


K3

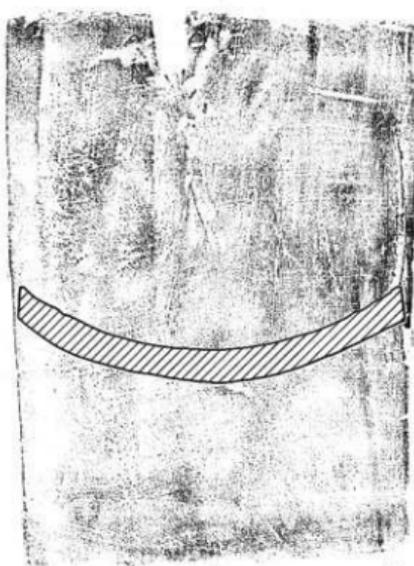


K4

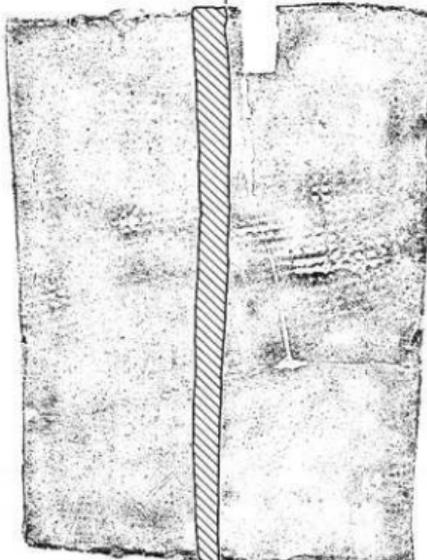
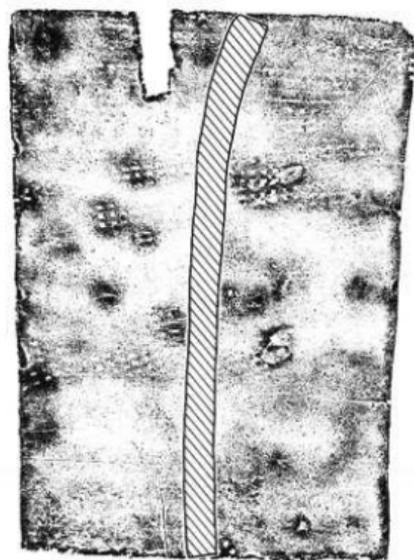


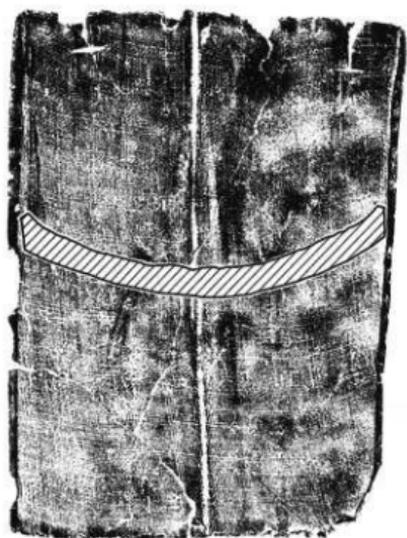


K3

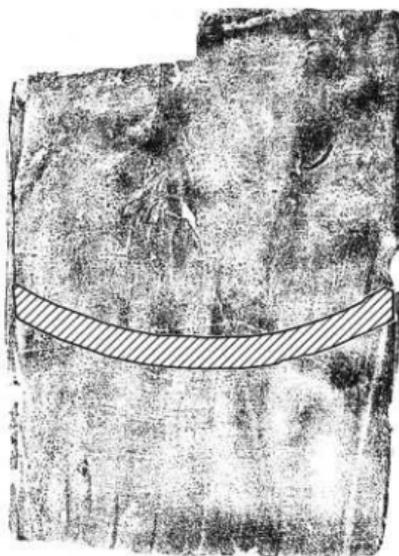


K3

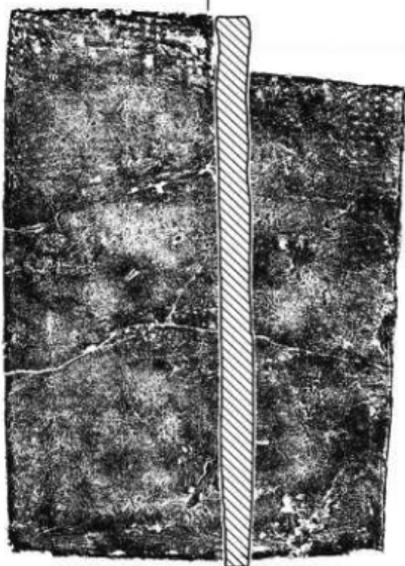
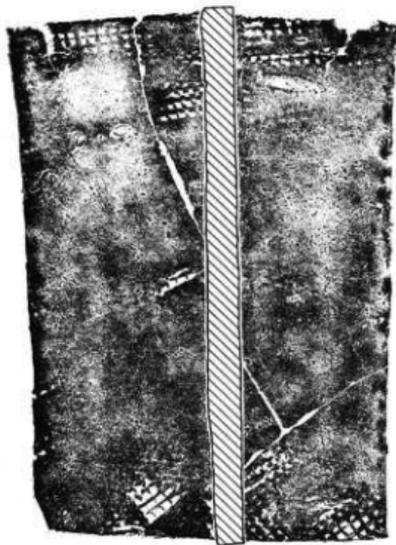


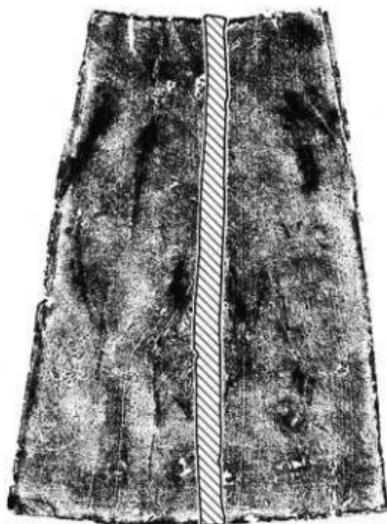


K7

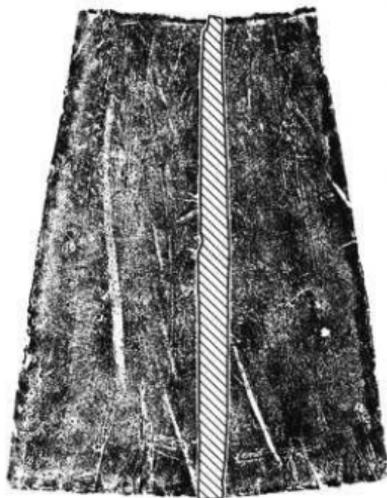


K8

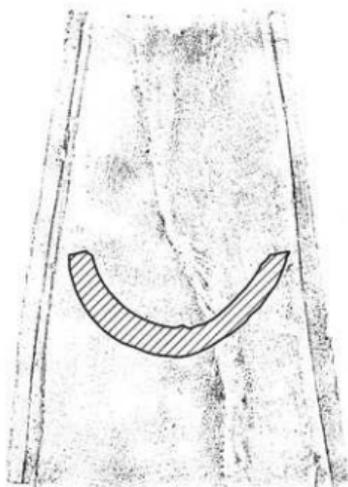
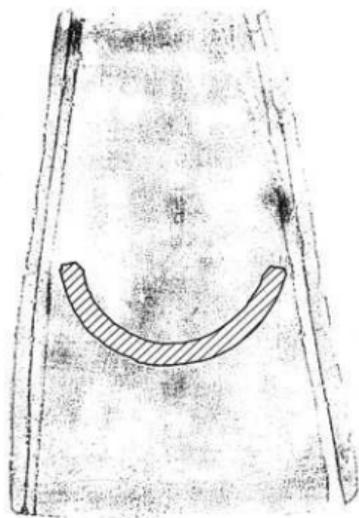


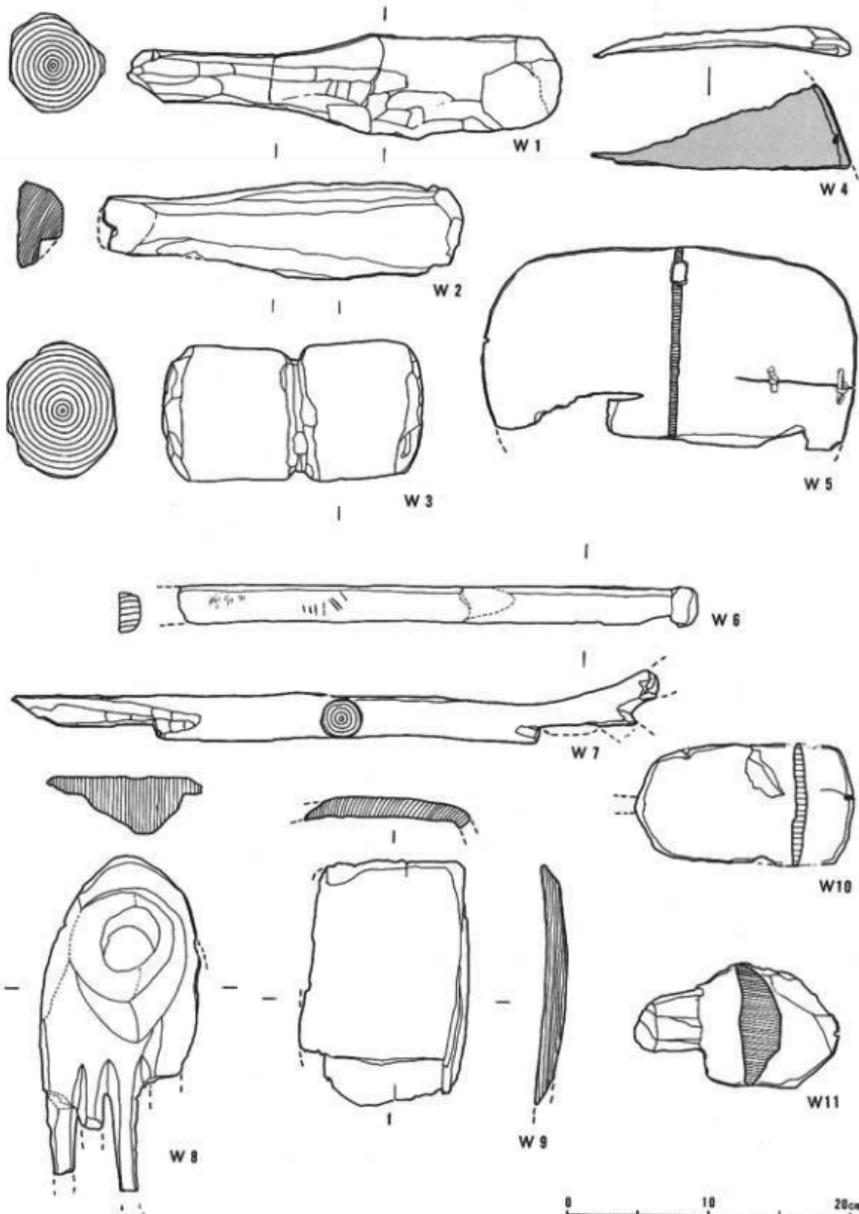


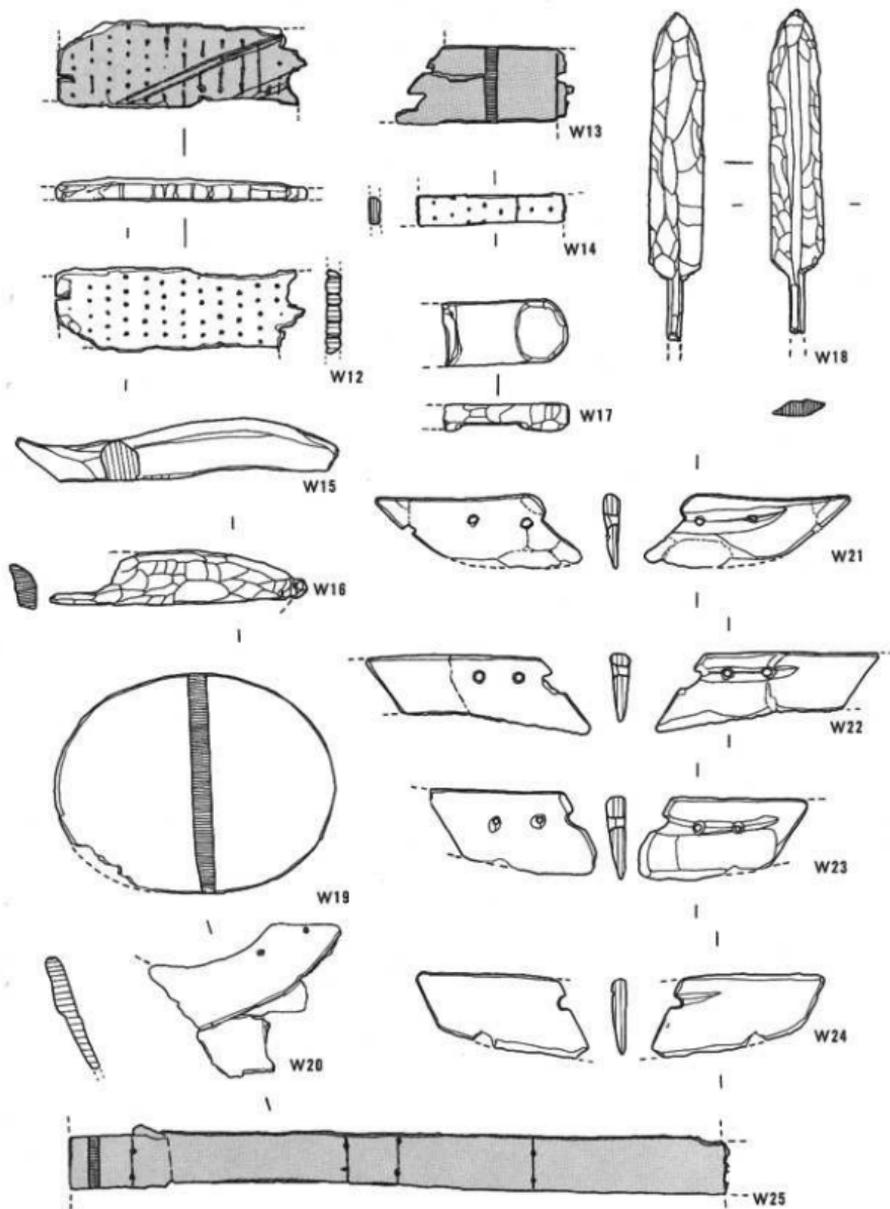
K10



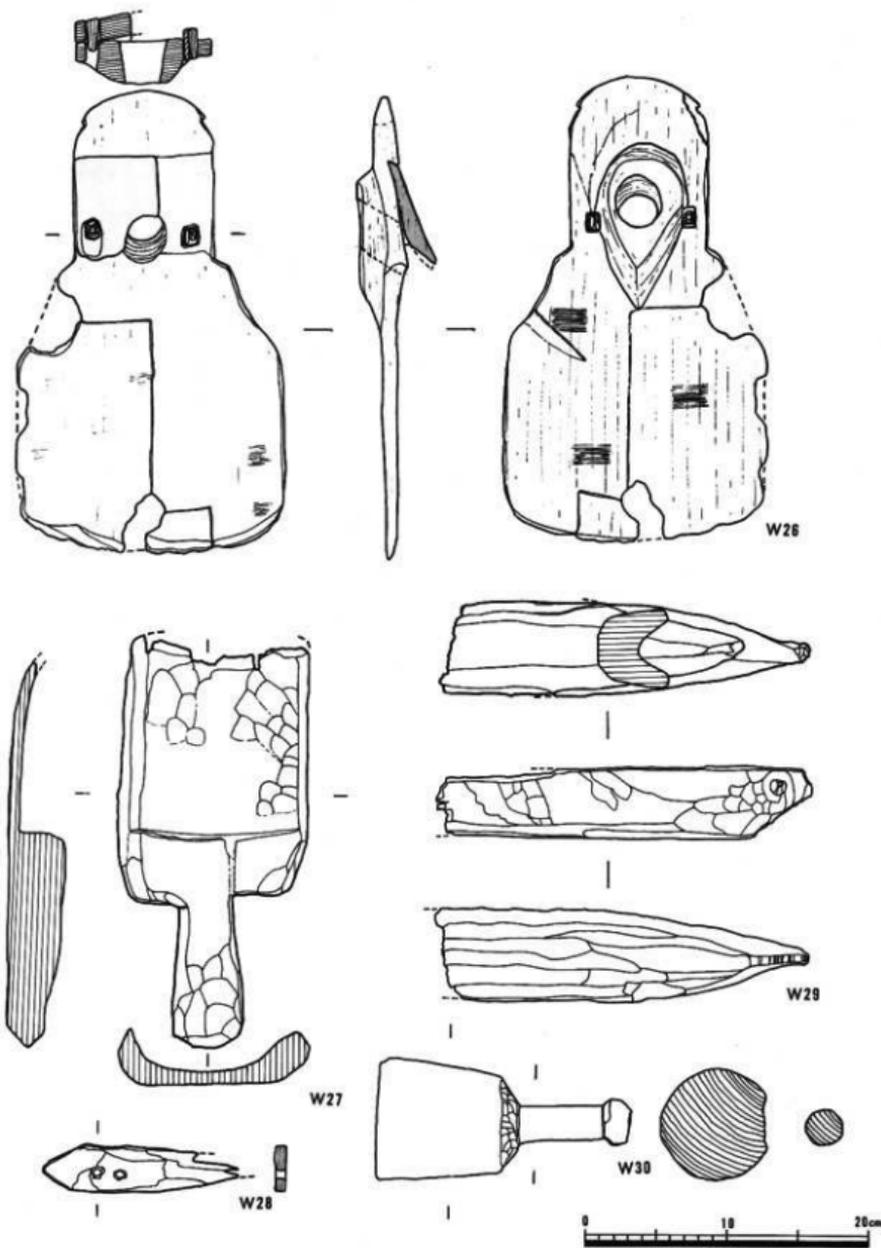
K11



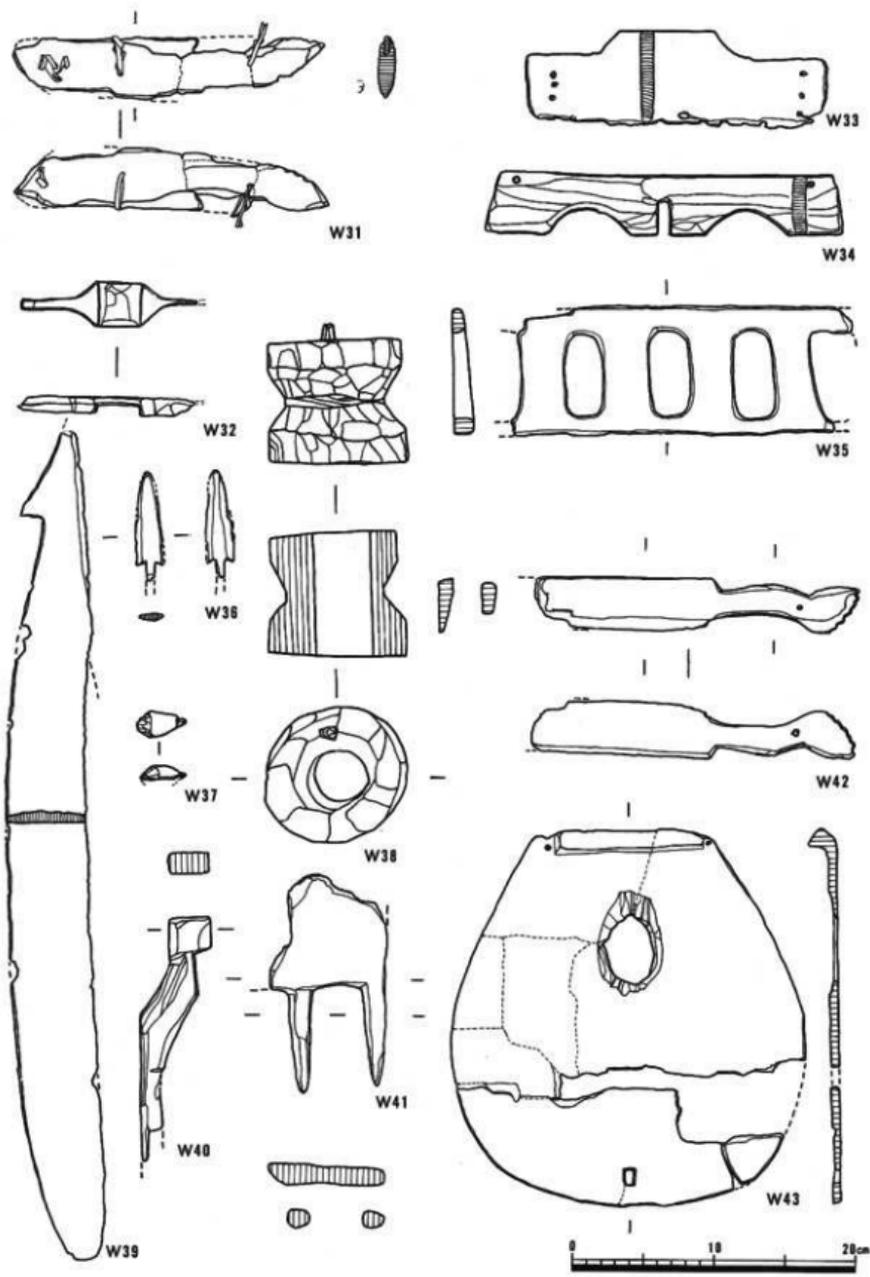




SD-2・包含層(W23、W24)出土



足跡遺構(W26)・包含層出土



SD-2 (W41)、SD-3 (W32、W37、W38) 足跡遺構(W43)包含層出土

湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化
財発掘調査概要報告書 赤野井湾遺跡

昭和61年3月

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9780

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3番18号
